

# 聖徒の道 1 1975



## 心の糧



愛は人の霊と同様に永遠である。従って人が死後もその存在を失わないとすれば、愛もまた永遠に生き続けるであろう。

地上にある事物が天の事物のひな形だとすれば、愛する人と霊界で会ったとき、私たちはその人のことを思い出すであろう。私は妻をほかのだれよりも愛している。また子供たちをも愛している。私は全人類に対して思いをはせ、その救いを希求することができる。しかし今は、共に座して愛する子供の病いを、そして死をも見届けた私の妻を、愛したい。数知れぬ経験はふたりの心をしっかりとつなぐ。そのつながれた心と心が決して離れることがないとは、何と素晴らしいことか。あなたは後の世であなたの妻と会い、ふたりはこの世におけると同じように愛し合う。そして不死不滅の体を得て共に復活するのである。愛がこのようなに永遠に続くものだとすれば、なぜ死がふたりを分かつと言えようか。

そうは言えない。いや、そう言う必要もないのだ。救い主イエスキリストから正当な権能を授けられた人々により、主の宮居において永遠の結婚の儀式が執行されている。ここでひとつに結ばれた夫と妻、そして両親と子供は、今も永遠の世にわたっても、もはや離れることはない。そして家族は、永遠に存続するのである。

以上が神殿の目的のひとつである。

大管長 デビッド・O・マッケイ  
(スイス神殿献堂に寄せて)

末日聖徒イエス・キリスト教会

も く じ

大管長会

スペンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
デルバート・L・ステイプラー  
リグラント・リチャーズ  
ヒュー・B・ブラウン  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・パッカー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ  
(内務伝達部長)  
ジョン・E・カー  
(配送翻訳部長)  
ドイル・L・グリーン  
(教会誌編集主幹)  
ダニエル・H・ラドロウ  
(教会教課企画調整主任)

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼 修 一

神殿と永遠の結婚.....2.....スペンサー・W・キンボール

神殿の設計.....6

末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿.....8

なぜ神殿を?.....14.....ゴードン・B・ヒンクレー

日々の恵み.....16

一輪の花.....20.....マリア・シリング

信 仰.....21

私たちの友だち すばらしい宣教師.....22

おもちゃばこ.....24

とときはいつだって正しい.....26

「逸話集、近代の使徒の生涯より」.....29.....レオン・R・ハートショーン  
マシュー・カウリー

私の改宗.....32.....ファビオ・クラビホ

待ち望んでいる先祖のために.....35.....ホイト・パーマー

エリヤの力.....37.....セオドア・M・バートン

少年には男らしさの模範が必要である.....39.....マリオン・D・ハンクス

墓での三日間.....43.....エルドレッド・G・スミス

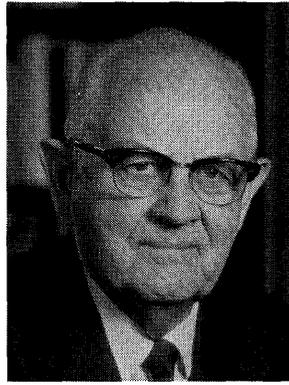
ローカルニュース.....46

聖徒の道 1月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-8-10

配 送 東京ディストリビューション・  
センター  
東京都港区南麻布5-10-25

定 価 年間予約1,700円 1部 150円  
海外予約2,200円



# 神殿と永遠の結婚

スペンサー・W・キンボール大管長

神殿結婚は、死を越え、時を越えて、止まることなく永遠へと続く誓約である

生命は永遠である。死は存在の終着駅ではない。人は永遠に生き永らえるのである。善人、悪人を問わず人は皆復活する。霊は墓より出た体と再び相合し、もし人が人生を完うし神より与えられた機会を全力を尽くして遂行したならば、その霊と体は相合して再新され、いつまでも終わることのない不死不滅の体となるのである。

真の結婚生活がもたらす最大の喜びは永続させることができる。最高に美しい親子の関係も永久のものとすることができる。夫と妻が永遠の結婚という聖なる絆で結び固められている限り、家族の至純な交わりは決して終わることはなく、また喜びと進歩は尽きることを知らない。だが、それは決してひとりでの起こるものではない。

道は明確に示されており、だれの目にも明らかである。永遠の結婚について、アダムや他の予言者は知っていたが、それについての知識は十数世紀もの間この地上から失われていた。しかし神は真理を回復され、道を備えられた。福音の回復と共に真の神権がもたらされ、神は予言者に、アダム、アブラハム、モーセ、並びに古代の使徒が保持していたすべての鍵、権能、権威を与えられたのである。

神は神殿とその目的についての知識を回復された。今日、地上には主の特別なみ業を遂行するために聖なる建物が建造されており、その一つ一つが「主の宮居」である。これらの神殿には、正しい権威のもとに、家族を永遠に結び固めることのできる人がいる。このことは、たとえ多くの人に知られていずとも事実なのである。

次の聖句は贖い主のみ言葉の中で理解しにくいもののひとつである。主は譬で群衆に教えられた。

「わたしは口を開いて譬を語り、世の初めから隠されていることを語り出そう。」(マタイ13:35)

たまにしか聖典を読まない人にとって、これらの貴重な真理は理解できない。

「いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外にだれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。

生まれながらの人は、神の御霊の賜物を受け入れない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない。」(Iコリント2:11, 14)

それにしても聡明で理解力があり、しかも高等教育を受けた人々が、上記の聖句にあるようにこの大いなる特権を無視したり、故意に軽視したりするとは信じられないことである。門はいつでも開けることができる。ギャップを埋めることもできる。そして人は決して終わることのない幸福に向かって安全に、かつ確実に歩を進め、結婚を永遠のものとすることができるのである。

譬話を説明して、救い主は言われた。

「……あなたがたには、天国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていない。

この民の心は鈍くなり、その耳は聞えにくく、その目は閉じている。それは、彼らが目で見ず、耳で聞かず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないためである。」

(マタイ13:11, 15)

それから救い主は御自分のそばにいた弟子たちに語りかけ、彼らが理解したのを見てとると、こう言われた。

「しかし、あなたがたの目は見ており、耳は聞いているから、さいわいである。

あなたがたによく言うておく。多くの予言者や義人は、あなたがたのしていることを見ようと熱心に願ったが、見ることができず、またあなたがたの聞いていることを聞こうとしたが、聞けなかったのである。」(マタイ13:16, 17)

主は、誠実で王国の奥義を知りたいと心から願う人は、祈りの気持をもって自ら納得するまで尋ね求めるということを知っておられた。

主を陥れようとして難問を投げかけた偽善的なサドカイ人に、主がどのように答えられたか覚えておいでであろう。

その男は子がなくて死んだので、残された妻はその弟と結婚したが、彼もまた子がなくて死んだ。そこで彼女はモーセの律法に従い、三男、四男、五男、六男、七男と次々に結婚したが皆、子孫を残さずに死に、この七人の夫の妻となった女も死んだ。さてその狡猾な質問とは次の通りである。

「復活のとき、彼らが皆よみがえった場合、この女はだれの妻なのでしょう。七人とも彼女を妻にしたのですか。

(マルコ12:23) 救い主の答えは明快、簡潔で誤解の余地がなかった。

「……あなたがたがそんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからではないか。」(マルコ12:24)

さて、この聖句はどういう意味だろうか。あなたがたにお尋ねしたい。サドカイ人たちは、自分たちがおおよそ何も理解していない事柄について討論していた。救い主の言葉に非難めいたところがあっただろうか。主はサドカイ人たちに、「目の覆いを取り去って、よく見なさい。かたくなな心を開いて、理解しなさい」とそう言おうとされたのだろうか。

皆さん、あなたがたは主が言われたこのみ言葉にどのような意味があり、またその真理が何であるかを理解しておられるだろうか。この聖句はやや理解し難いものであったが、近代の啓示が与えられた今、その意味は明白である。

ジェームズ・E・タルメージ博士は次のように書いている。「主イエスの言われた言葉の意味は明らかである。すなわち、復活した状態において、この女が永遠にだれの妻なのかということについては、七人の兄弟の間に何も疑問もあるはずがない。一番上の兄のほかにこの女をめとった六人の兄弟は、すべてこの世にいる間だけ妻にしたのであって……復活の状態、彼らはめとったりとついだりしないであろう。それは現世から永遠にわたり結婚の「結び固め」を行なう神権の権

能のもとに、夫婦の状態に関するあらゆる問題がすでに解決されているからである。」(「基督・イエス」P.445)

確かに、最初の夫はその女と時を越えた儀式によって永遠に結ばれた。彼女は夫の死に伴い、自らも世を去って再び夫に会うまで未亡人となったのである。さて、彼女は次男と、「死がふたりを分かつまで」の結婚をした。そして子孫をもうけないうちに死がふたりを分けてしまったことは事実である。次男は妻なくして暮の彼方を通り抜け霊界に行った。ふたりの契約も死と共に効力を失ったのである。三男、四男、五男、六男、そして最後には七男と、次々に皆その女と結婚したが、それらはいずれもかりそめの、この世限りの結婚であった。それは「ふたりが共に生きている限り」という限られた儀式だったからである。そして、彼らが得ていた幸福、将来に約束されていた至上の喜びというものは、死をもって終りを告げたのである。

何と悲しいことか。何とみじめなことか。

私は一組の若い夫婦を知っている。彼らの結婚生活は、挙式であの危険な契約の言葉、「死がふたりを分かつまで」を耳にしたわずか1時間後、自動車事故で無惨な終りを遂げたのであった。

民事結婚はこの世だけの契約であり、夫婦のどちらかが死ねばそれで終りである。永遠の日の光栄の結婚は、正当な権能を有する神のしもべにより、聖なる神殿において執行される。夫婦間の神聖な誓約である。それは死を越え、時を越え、永遠に続くのである。

使徒パウロはコリント人にこう語っている。

「もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあって単なる望みをいただいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。」(Iコリント15:19) 私たちはこの聖句を次のように言い換えることができる。

「もしわたしたちの結婚が、この世の生活でのみ堅固であって、夫婦の喜びが至上のものであり、そして家庭生活が幸福であるのだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。」

パウロは続けて言っている。「天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。

日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。またこの星とあの星との間に、栄光の差がある。

死人の復活も、また同様である。……」(Iコリント15:40-42)

パウロと同様多くの聖徒たちはこの意味を理解していた。しかし、今日の数百万にのぼるクリスチャンは、この譬の裏に隠れている大切な真理を理解していない。天国はただひとつの場所でもないし、同一の状態でもない。人の行ないが異なると同様、種々に分かれている。人は「現世での行ないに応じて」裁きを受けるからである。

近代の啓示の中で主は言われた。

「この故に、わがまさに汝に与えんとする教えを受け入れてこれに従わんため、汝の心構えをなすべし、すべて、この律法を啓示さるる者共はこれに従わざるべからざればなり。

見よ、われ汝に一つの新しく且つ永遠の誓約を啓示す:……」(教義と聖約132:3、4)

世の中で、この誓約を理解している人は比較的少ない。新しくかつ永遠の誓約とは、聖なる神殿において正当な権威ある鍵を持ち正式に任命された指導者により執り行なわれる結婚の儀式である。男性も女性もこの栄えある祝福を、この地上において得ることができる。贖い主御自身がその根本にある深い意味を明確にしておられる。

「この新しく且つ永遠の誓約に就きては、こはわが最高完全なる光栄のために定められたるものにして、わが最高完全の光栄を受くる者はこの律法を守らざるべからず、またこれを守るものとす。然らば、その者の行き止りなるべし。主なる神言う。」(教義と聖約132:6)

パウロは、日、月、星の世界について述べ、人は正義と永遠の律法とにどれだけ従順であったかに応じてその場所を定められると言っている。日の光栄の王国においてさえ三種の天界、すなわち三種の階級があるのである。続けて主のみ言葉を引用しよう。

「而してその最も高きものを得んために、人はこの神権の位(すなわち新しく且つ永遠の結婚誓約を言う)に入らざるべからず。

人もし然せずんばそれを得ることを得ず。

人は他の天界に入るを得べし。されど、そはすなわちその人の光栄の国の行き止りにして、また殖ゆること能わず。」

(教義と聖約131:2-4)

主は永遠の結婚についてさらに明らかにしておられる。

「……一切の誓約、契約、約束、義務、宣誓、誓言、履行、関係、交際または予約にして、為されまたは結ばるとき、



……また「約束の聖きみたま」によりて今も永世にも亘りて結び固められずば、すなわちまたこれら最も聖くあらずば、死にし者より復活する時もその後にも何らの効験効能または効力あることなし。……以上の事然るは、以上の目的を以て結ばれざる一切の誓約は人の死を以て終りを告ぐればなり。」(教義と聖約132:7)

そういうわけで、単に「ふたりが共に生きている限り」とか「死がふたりを分かたずまで」という約束でなされる結婚は、悲しくも息をひきとった時点で終りを告げるのである。

主は憐れみの深い御方である。しかし憐れみが正義の働きを奪うことはできない。憐れみは、主が身代りて御自身の命を捨てられることによりその効力が及ぶようになった。一方正義は主が私たちに裁かれるとき、また私たちに恵みを下さるときに効力を及ぼす。そしてその祝福は、私たちの行ないに応じてもたらされるのである。

「何人もすべてこの誓約を拒絶するを得て、而もわが光栄に入るを許さるる者あらざればなり」と主は仰せになる。

「すべてわれによりて祝福を受けんと願う者は、その祝福を与うるために定められたる律法と条件を創世の前より定められたるままに守らざるべからず。」(教義と聖約132:4、5)

民事結婚は、各々の国の法律の定めるところにより認可された大勢の人々によって執り行なうことができる。しかし永遠の結婚を挙行することができるのは、正式に権能を授けられたほんのわずかの人である。救い主は言っておられる。

「……わが名によりて為されざる捧物をわれいかで受くべきか。

または、わが命ぜざりしものを汝らの手より受け入るることをせんや。」(教義と聖約132:9、10)

贖い主は語る。

「この故に、ある男もしこの世に於て妻をめとるに、われに由らずまたわが言葉によらずしてめとり、またその男この世にある限りその妻と誓い、妻またその男と誓うに、この誓も婚姻も彼ら死にてこの世の外に去る時は効力あることなし。この故に、この二人この世の外に去る時は如何なる律法もこれを結ぶことなし。」(教義と聖約132:15)

何という決定的な恐るべき宣言であろうか。私たちの存在は肉体の死によって終わるのではない、永遠に生き永らえるのである。実に多くの家庭で営まれている楽しく幸せな結婚生活、家族の生活が、神の教えに従わないという理由で、またみ言葉を理解しているにもかかわらず受け入れないという理由で死と共に終わってしまうとは、何とも恐るべきことではないか。

義なる男性、女性は自らの行ないに応じてその受くべきところの報いを受けることは主のみ言葉に明らかである。しかし、もし彼らが永遠の結婚という神の律法に従わないならば、一般にいう罰を受けることはなくとも、多くの制限を受け、最高の栄えに進むことはできない。彼らは、すべての律法と戒めを従順に守った者に仕えるしもべとなるのである。

ふさわしい生活を送ったにもかかわらず、契約を結ばなかったこれらの人々について、主は引き続き述べておられる。

「これらの天使はわが律法を守らざりし故に、殖ゆることを得ずしてただ別離孤独にて最高の栄に進み得ることなく救われたまま永久に変わらず。これを以て、彼らは神々にあらず永久に神の天使たるなり。」(教義と聖約132:17)

何と明確な言葉であろう。いかに拘束され、制限されていることか。こうして私たちは、この時、この現世、この死すべき世が「神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である」という言葉の重みを新たに認識するのである。永遠を通じて、いわゆる独身生活を貫くことはいかに寂しくつまらないことであろう。資格を得て、正当な権能の下に神殿で幸福な永遠の結婚をし、喜びと幸福を増し加えつつ進歩、成長して神の位にまで高められるというのに、果てしもなく別離孤独の状態に甘んじなければならぬことは何と悲しいことか。

再び主の声に耳を傾けてみよう。

「誠にまことにわれ汝らに告ぐ、汝らわが律法を守るにあらざればこの光栄に達するを得ず。

およそ最高の栄に進むを得て生命をつずくるに至る門は狭く、道は細くしてこれを見出す者は少し。そは、汝らこの世

に於てわれを受け入れず、またわれを知らざるに由る。

されど、もし汝らこの世に於てわれを受け入れなば、汝らわれを知りて最高の栄に進むを得ん、すなわちわが在るところに汝らもまた在らん。

こは、永遠の生命なり。すなわち、唯一の知恵ある真実の神と、その神の遣わしたまいしイエス・キリストを知ることなり、われは、その遣わされたる者なり。故に、汝らわが律法を受け入るべし。

それ死に至る門は大きくしてその道は広し、而して其所より入る者数多し。彼らはわれを受け入れず、またわが律法を守らざるによる。」(教義と聖約132:21-25)

主を受け入れ主を信じる者は、その戒めを守り、主が要求される儀式を完うする。

永遠ということ、永続する幸福、神にまみえ神と共に住まうという特権、あなたがたはこれらのことを自ら危くしてはいないだろうか。調査研究や瞑想の欠如のために、すなわち偏見や誤解、知識の不足から、この大いなる祝福と特権を自ら失ってはいしないのか。また、自らを永久に別離孤独で寂しく生き、他人に仕える者にしてはいないか。子供が死んだり、あなたがたが世を去る時、自分の子供を見放しめず孤児にしたいと思うのか。生涯に得た最高の喜びすべてが、「更に付け加えられ」、強められ、いや増し加えられて永遠のものとするのに、ただひとり孤独なままで永遠の道を進みたいと思うだろうか。それともサドカイ人と同様に、この大いなる真理を無視ししりぞけたいであろうか。私は、あなたがたが今日、それらのことを熟考しよく思い図って、幸福な結婚を永遠のものとするのだと信じてつ歩み出すことを心から祈っている。皆さん、どうかこの呼びかけを無視しないでいただきたい。あなたがたの目を開いて見、耳を澄まして聞くことをやめないようにとお願いする。

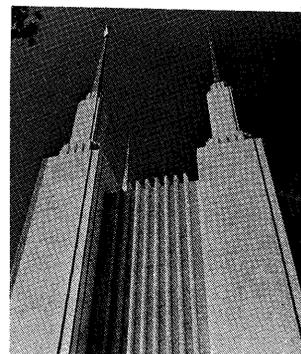
永遠の結婚をし、限りない幸福と昇栄がもたらされるのである。

万軍の主のみ言葉で閉じたいと思う。

「そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買ひ、また、あなたの裸の恥をさらさないため身につけるように、白い衣を買ひなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買ひなさい。」

(黙示3:18)

# 神殿の設計



大管長会の指示のもと、ふさわしい  
構想を練る建築家たち

「末日聖徒の建築家にとって、天父の神殿の建築に携わることは、最高の名誉です。ほかにどんな仕事と考えられるでしょう。」

これが、プロボ、オグデン両神殿の設計者である教会建築家イーミル・B・フェッツァー氏の気持である。フェッツァー兄弟はワシントン神殿を設計する建築家たちの人選をした。この仕事に推薦され、大管長会の承認を受けた人々は、ハロルド・K・ピーチャー、ヘンリー・P・フェッツァー、フレッド・L・マーカム、ケイス・W・ウィルコックスの諸氏である。

以上4氏は共同作業は初めてとはいえないものの、神殿設計の責任を受けて意欲的なチームを組み、各自のインスピレーションを出し合い、徐々にひとつの靈感によるデザインに練り上げていった。

プロボ、オグデン両神殿の機能的なデザインに満足した大管長会は、ワシ

ントン神殿にも、それと同様の斬新な部屋別セッション計画（日の栄の部屋を囲んで儀式的の部屋を幾つも設ける）を主体とするよう指示し、大管長会はさらに、深みを持つ他を抜き出した美しい建物にするように要請した。

マーカム兄弟が責任者に指名され、仕事が始まった。彼らの意気込みは、計画会は祈りによって始め、仕事に関して多数決による決定は一切しないというふたつの方式からうかがわれる通りである。何についても不一致があれば、全員一致が得られるまで話し合いが行なわれた。

彼らは自分の構想をスケッチし、まとめて見直し、構成した。各自は「心の中によく思い計り」、ひとつのアイデアに苦心惨憺の経験をし、それを同僚たちにはかった。意見や批評の出た中から、次第にひとつのデザインが浮かび上がってきた。幾分ソルトレーク神殿に似た多塔形式の構成である。その



デザインは、すみに塔を配した六角形で、それが伸びて変形ダイヤモンド形になっている。大管長会と十二使徒評議員会の承認を受けたとき、設計者たちは彼らの働きと祈りの成果に確信を得た。

建物は強化コンクリートで建てられた。助材で支えた壁の重厚感を損なわずに内部に自然光が入るように、半透明大理石の「窓」が設計された。この「窓」は外部からは固い壁に見えるが、内部には七色の光を放つ。

東端と西端の多面ガラスの窓はとりわけ美しい。多量の光線を屈折させるようにへりを削った3センチ厚さの色ガラスを継ぎ合わせてできている。

窓枠は2メートル余りの幅で、深みのある色彩の輝くガラスが、地面から神殿の上端まで走っている。地面近くの色は豊潤闊達な赤色やオレンジ色で、上に行くにつれ清澄な色に変わり、青色、すみれ色、そして最後は白になる。ヘンリー・フェッツァー兄弟の説明によれば、色の変化は、この世の事柄を離れて天の事柄を望むにつれ、清さと純粋さが人の生活を満たしてくることを象徴したものだというのである。

内部の色も変化している。くるみ材の羽目板と濃紺色のじゅうたんは、次第に金色をアクセントとして白っぽくなっていく。壁と天井が白色の日の栄の部屋には、かすかな赤味を帯びた金色のじゅうたんが敷かれている。それ以外の色といえば草木だけである。

もうひとつの特色は、表玄関の扉と、北側の裏玄関の引き門のデザインである。末日聖徒の彫刻家フランツ・ヨハンセンによる8個のブロンズの円形浮彫が、北斗七星と北極星、地球、惑星、月、恒星と、永遠を表わす同心円、伝統的な太陽、そして7つの神権時代を表わす同中心の7つの五角形を描き出している。このデザインは、創造と現世と各種の栄光の象徴である。

神殿南側の縦横それぞれ32メートル、16メートルほどの池は、神殿と同じ細長いダイヤモンド形である。この池は遊歩道の南端にあってその美しさは格別である。

両端の主塔は旧来メルケゼデク神権とアロン神権を意味しており、メルケゼデク神権を示す塔はもう片方の主塔よりも高い。建物に一連の流れを与えるため、側面の塔も高さが均等でない。1メートルから1メートル半の違いが神殿に連続的な動感を与えている。ヘンリー・フェッツァー兄弟は、「このデザインで、躍動し、前進する生ける教会を表わす」と考えている。

ワシントン神殿の地域にはプエルトリコやモンリオールも含まれ、外国人の参入者が多いと予想されるので、儀式的部屋の席数の半分ほどにイヤホンの設備がある。現在はスペイン語とフランス語用に計画されているが、将来はその他多くの国語に使われる予定である。

建築家たちは簡素、静穏、荘重を神

殿建築の目標としたが、彼らは神殿設計に、個人の心からなる願いも込めていた。

ウイルゴックス兄弟にとって、神殿は教えの目に見える象徴であり、彼にとっては神殿のひとつが教会の全精神を集約している。彼はこう語る。「今振り返ってみると、私たちはひとつの主の神殿の設計を指導するべく、主のみ手の道具になったことを感じて、深い謙遜の思いに打たれるのです。」

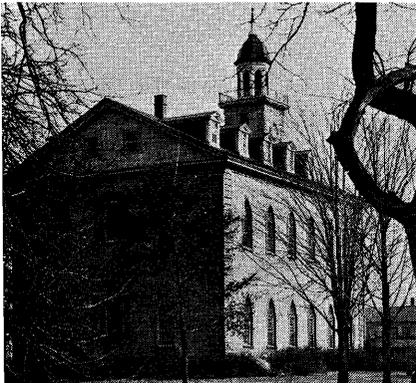
マーカム兄弟はこのように言う。「この25年余り、私は神殿の仕事に大きな関心を持ってきました。しかしこの建物の建築を通じて、神殿事業への証、特に神殿の儀式を受けようとするときには多くの細かい事柄の意味をぜひとも考えて、充分理解しなくてはならないという証がさらに強くなりました。」

ビーチャー兄弟は、「神殿は日ごとに美しさを増すと思います」と語った。

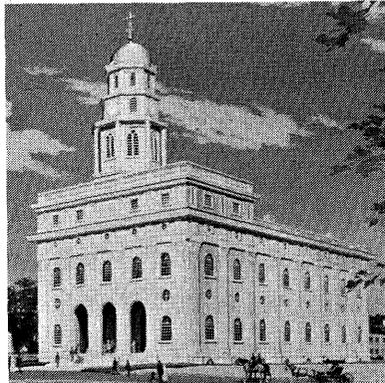
そしてヘンリー・フェッツァー兄弟はこのように述べた。「ソルトレーク神殿の中に座って豊かな装飾をながめ、開拓者たちがあのようにすばらしい建物を建設できたことに驚嘆したとき、私たちが力の限りをこの神殿に注ぐことは当然だと思いました。この建物には生ける人々だけでなく、この世を去った霊たちが自分のために行なわれる儀式を見にやって来ますし、主の天使や主御自身も来訪されるのです。ですからそれなりの美しさを保つものでなければならぬのです。」

# 末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿

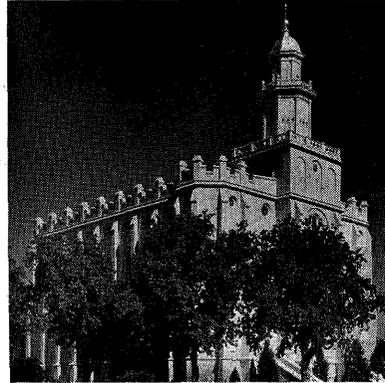
写真は救いへの旗じるしとして立つこの神殿時代の16の  
神殿で、本号のために特別に撮影したものである。



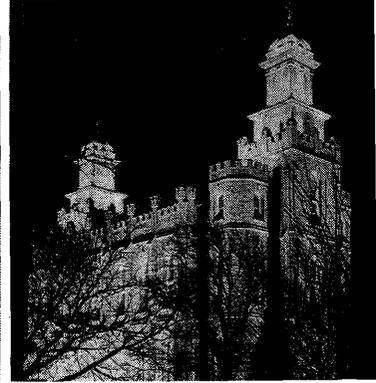
カートランド神殿



ノーブー神殿



セントジョージ神殿



ローガン神殿

「神殿とは何ですか」とはよく尋ねられる質問である。その問いに対する私たちの答えはこうである：それぞれの神殿は「祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家、栄光の家、秩序の家、神の家」（教義と聖約88：119）として神に献納されたものである、と。

イエス・キリストの福音は、すべての人類は福音の律法と儀式に従うことによって救われると教えている。しかし、このような福音の計画があることを知らずにこの世を去った人々が、過去に数10億といる。救いの計画がただひとつであるからには、これらの人々がこの計画のことを耳にし、それを受け入れるか拒むか、いずれであってもその選びの特権を行使できるよう、何らかの備えのあることが確かに必要である。そしてその計画は、死者のための救いの原則の中にあるのである。……

神殿の中では生者のための儀式と、死者のための生者による身代りの儀式が執行されている。至高者の神権によって執行されるすべての儀式は、愛と同様に永遠であり、生命と同様に永続するものである。そしてこれらの儀式に従うことによって、すべての人類は生者も死者も、神の王国に入って永遠にそこに住まうことができる。……

結婚の誓約が永遠にわたるといふ教えは何とすばらしい啓示であろうか。そしてそれは、愛という黄金の留め金でしばられ、聖なる神権の権能によって結ばれた人々の心に、その結び付きは永遠であるという確信を与えるのである。

——デビッド・O・マッケイ  
（「インブルーヴメント・エラ」, 1956年  
3月号, [英文] P.141, 142）

「福音がもたらすものはすべて、神殿の中で与えられる。バプテスマ、神権への聖任、生者と死者のための今も永世にも及ぶ結び固め、生者と死者のためのエンダウメント、福音の教授、伝道の業のための会議、その他福音に関連あるすべてのものが、ここで取り扱われる。事実、神殿の中で福音の全般が明らかにされている。」

——ジョン・A・ウィットソー  
（「Looking Toward the Temple」 「神殿を望み見る」, エンサイン誌, 1972年1月号, [英文] P.58）

## カートランド神殿

当時のアメリカの建造物の中でも群を抜いたものと認められているカートランド神殿は、聖徒たちがひどい困窮

のさ中に、「大いなるエンダウメント」と彼らの上に注がれる「祝福」とを受けけるために建てたものである。（教義と聖約105：12）

神殿は3階建てで、外壁は石作りであるが、しっくい細工が施されている。多くの家族から犠牲を払って提供された美しい磁器とガラス器をひいて粉にし、しっくいに混ぜて塗った。このために外壁は輝きを放っている。

1833年の着工から1836年3月27日の献堂までの期間、聖徒たちは力の限りを尽くして働き、また生活もできる限り切り詰めた。こうして、地上約34メートルの塔を持つ、約18×24メートルの大きさの神殿が建てられた。

1886年4月3日、救い主はここを訪れ、御自身の宮としてその神殿を受け入れたもうた。次にモーセが訪れてイスラエルの集合の鍵を教会に託し、エライヤスが訪れて彼の持つ権能を受け、最後にエリヤ（エライジャ）が訪れてマラキの予言を成就した。（教義と聖約110章参照）

この神殿は神聖な建物として2年間使用された。しかし迫害のために大勢の聖徒たちがオハイオ州を出ると、神殿は迫害者によって汚されてしまった。その後この建物は修復され、現在復元

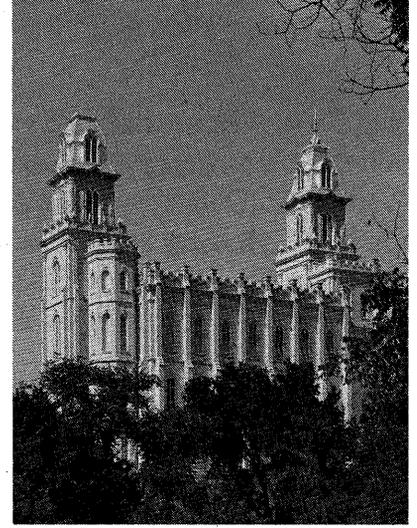
イエス・キリスト教会が集会所として使っている。

### ノーブー神殿

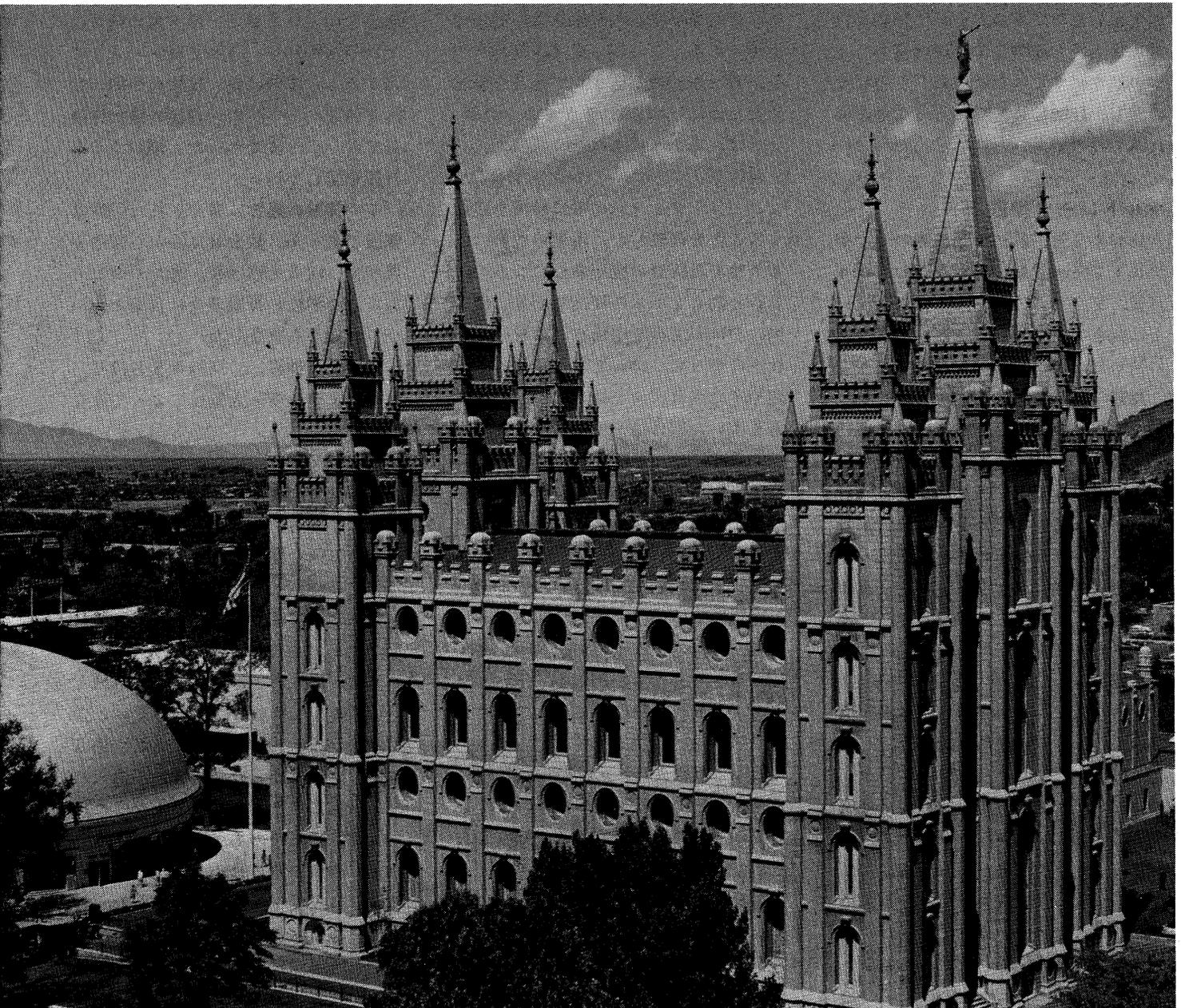
「……われ再び汝らにわが名のために誠に此所に一つの家を建てよと命ず。かくて汝らは、何事にもわが命ずる所にすべて忠実なるを証し、また以てわれは汝らを祝福し誉と不死不滅と永遠の生命とを汝らの頭にかざらんためなり。」(教義と聖約124:55)

1841年、主はイリノイ州ノーブーで予言者ジョセフ・スミスにこのように告げられた。これ以前に、聖徒たちは止むを得ずカートランド神殿を放棄し、またミズーリ州ジャクソン郡とファールウェストでさらにふたつの神殿用地を献納しながら建築ができない状態にあった。

こうして聖徒たちは淡い灰色の砂岩で美しい建物を建てた。しかし、それが使われたのはわずか2ヵ月間である。



マンタイ神殿



ソルトーク神殿

主はこの神殿の使われる期間がこのように短いことを御存知であった。大きな試練が神の民の将来に待ち受けていた。従って、彼らが生き延びて神の王国を築くためには、神殿においていと高き所から授けられる力を得る必要があったのである。

1845年12月に神殿でエンダウメントの儀式が始められ、その月の終わりまでに千人以上の教会員がこの祝福を受けた。その後神殿は1846年2月7日に閉じられ、聖徒たちがミシシッピ川を渡って西へ逃がれた結果、ノーブーは廃虚と化したのである。そして1848年11月には火災で建物全体が焼け落ち、4つの壁を残すだけとなった。さらにその壁も、1850年の旋風によって地に崩れ落ちたのであった。

### ソルトレーク神殿

1847年7月、最初の開拓者の一行がソルトレーク盆地に到着したわずか4日後、ブリガム・ヤングは杖を砂漠の土に突き立ててこう言った。「私たちの神のためにここに神殿を建てよう。」

1853年2月に鋳入れ式が行なわれ、40年の歳月と総工費400万ドルをかける建築が着工された。神殿の建築には見出し得る限り最良の材料を使用することが決定された。そのため、東方約32キロの峡谷で採石される灰色の花崗岩が、牛車によって神殿用地に運ばれた。ひとつの岩を運搬するのに、4対の牛で3日から4日かかる骨の折れる仕事であった。

労働の厳しさと、開拓者の貧困が原因して、工事は何度も中断した。しかし1873年までには鉄道が敷かれ、テンブルスクエアに線路が敷設されて花崗岩が運べるようになった。しかし、ブリガム・ヤングが亡くなった1877年までに、神殿の壁はわずか6メートルの高さにまでしか達していなかった。続くふたりの大管長、ジョン・テイラーとウィルフォード・ウッドラフがこの工事は引き継がれた。そして1898年4

月5日に最後の仕上げが行なわれ、神殿は一般の人々に公開された。その翌日、すなわち1898年4月6日、ウッドラフ大管長の祈りで献堂された。以後4月24日まで合計31回の献堂式が執行された。

この神殿はブリガム・ヤングが宣言したように、「山間に住む19世紀の神の聖徒の、信仰と忍耐と勤勉の光栄ある記念碑」となったのであった。

### セントジョージ神殿

ユタ州の西南端には、長さ約130キロの帯状をなす、亜熱帯気候の肥沃な土地がある。この地は南部諸州出身の改宗者たちが送り込まれて綿花を栽培したために、ユタの「デキシーランド」と呼ばれるようになった。

1871年、ブリガム・ヤング大管長は、ここセントジョージの町に神殿を建設することを発表した。用地の北側にある天然の石灰岩の棚が基盤になった。しかし間もなく水の浸透により、他の側における工事を中断せざるを得ない状態になった。けれども独創性のある開拓者たちは、メキシコ戦争の遺品である古い大砲に鉛を流し込んで杭打ち機を作り上げ、それを使って何百トンもの火山岩をどンドンと打ち固め、神殿のためのしっかりとした土台を築いた。現在なお、この古い大砲は大切な記念品として神殿構内に保存されている。

建物はその地方で得た砂岩で作られており、白のしっくい塗られている。1877年1月、死者のバプテスマとエンダウメントを執行できるように、建物の一部がウィルフォード・ウッドラフによって献堂された。その後、1877年4月6日に、大管長会のダニエル・H ウェルズ副管長が建物全体を献堂した。そして、同1877年4月6日から8日まで、教会の第47回年次総大会が、この神殿において開催された。

### ローガン神殿

ローガンは、ソルトレーク・シティ

一の北方約133キロの、美しいカッシュ盆地にある。ローガンは1859年にモルモンの定住地となったが、その後間もなく、当時の住民はその地に神殿を建てたいと思うようになった。1863年、ウィルフォード・ウッドラフは、「東方のローガンベンチ上に建てられる栄えある神殿の塔に参入する特権にあずかる」日が来るであろうと聖徒たちに語った。

1877年5月、ブリガム・ヤングは、その山腹の神殿用地を奉献した。この5階建ての建物は濃い黒灰色の珪質石灰岩で作られており、西と東の端にはそれぞれ約50メートルと52メートルの塔がある。そのほか、建物の四隅には高さ約30メートルの八角形の塔が付随しており、一風変わった、城のような外観を呈している。

この神殿の建物に費やされた労働は無償であった。教会費は心から家畜や農産物、現金を捧げた。また子供たちも、日曜学校の神殿基金に自分たちの小づかいから献金した。

ローガン神殿は、1884年5月17日、ジョン・テイラー大管長によって献堂された。

### マンタイ神殿

1850年8月、ユタ州中部のサンピート盆地に住む聖徒たちのもとを訪れていたブリガム・ヤングは、そこでマンタイ神殿の建築計画を発表した。後にその用地について、ヤング大管長は「予言者モロナイが立ち、神殿用地として奉献した地点はここである」と語った。しかし、19世紀に建てられ、第6番目のものとなったこの神殿の鋳入れ式は、1877年まで行なわれなかった。

神殿は採石所のあった地点に立っている。岩盤が堅いため、堀削して平らにするのに1年半の期間を要した。神殿の建築には11年を費やしている。労働した人々には家畜や農作物で報酬が支払われた。しかしごつごつして、ほとんどが堅い岩地であるこの地を開拓

する仕事は、この上ない高い理想を抱いた勇敢な人々でなければ耐えられない辛いものだった。

ローガン神殿と同じように、この神殿も東と西の端に塔がある。西側の八角形の塔の内部はらせん階段になっており、地下から屋上まで5階にわたって続いている。そしてその中心部は何の支柱もなく空洞になっており、上から下まで完全にまっすぐである。また、階段は約28メートルの高さがあり、一様に渦巻き状で、くるみ材の欄干がついている。このような階段は他ではほとんど見られない。

神殿は1888年5月21日、当時十二使徒評議員会の一員であったロレンゾ・スノー長老によって献堂された。

## ハワイ神殿

ハワイ諸島のひとつ、オアフ島のライエにハワイ神殿が立っている。塔を持たない神殿は現在3つあるが、その中で最初に建てられた神殿である。(他のふたつは、アルバータ神殿とアリゾナ神殿である。)ハワイ諸島では建築資材がほとんど得られないために、容易に入手でき、砕いて加工すればすばらしいコンクリートになる火山岩を建築に使うことになった。内部の仕上げには、堅木が広範囲にわたって使用された。

神殿はギリシャ様式を一部取り入れており、東西約31メートル、南北約24メートルの大きさである。中央部は高くなっており、約15メートルある。また建物の外壁には、福音の4つの主要な

神権時代を描いた、4つの彫刻がある。

神権は1919年11月27日、ヒーバー・J・グラント大管長によって献堂された。

## アルバータ神殿

7台の幌馬車から成る41人の男女、子供の一行が、1887年6月にリースクリークのそばに野営した。これがカナダにおけるモルモンの定住地の始まりである。この中心地がカードストンの町となった。

それから数年後、十二使徒評議員会のジョン・W・テイラー長老が訪れ、その勇敢な開拓者たちにこう告げた。

「この地はやがて世界の穀倉となるであろう。そしてこの地に、全能の神を礼拝する神殿が築かれるであろう。」アルバータ神殿は、合衆国とハワイ以外に建てられ献堂された、最初の末日聖徒の神殿である。

建築は1913年から1923年までの期間を要した。この神殿は隣のブリテッシュコロンビア県のクートネー湖付近で切り出された美しい白い石でできている。八角形をしたこの神殿は、アルバータ平野にくっきりと白い姿を浮かびあがらせており、カードストーンに近づくとどの方角からでも望み見ることができる。神殿の内装にかしや黒檀、かえで、ゆりの木、アフリカマホガニー、その他様々な品種のくるみ材による美しい木細工が施されていることは有名である。

神殿は1923年8月26日、ヒーバー・J・グラント大管長によって献堂された。

## アリゾナ神殿

1878年、開拓者の一行が、現在アリゾナ州メサとなっている場所に住みついた。ここはフェニックスから26キロほど離れた所である。それ以来長年、彼らはユタへ長く苦しい旅をして神殿結婚していた。こうした中で1919年、アリゾナ州のファレスステーキ部、カリフォルニアとメキシコの伝道部で、メサに神殿を建てるための資金獲得運動が開始された。この結果、1923年に着工され、1927年10月23日にヒーバー・J・グラント大管長によって献堂された。

建築学上、この神殿は古代建築のアメリカ版であると言われ、なめらかな光沢のクリーム色のタイルで上張りされている。また美しい外壁の彫刻画は、地の「四隅」からのイスラエルの集合を描いている。

この神殿は、合衆国西南部に住む多くの聖徒と、メキシコや中央アメリカの聖徒たちのために使われている。

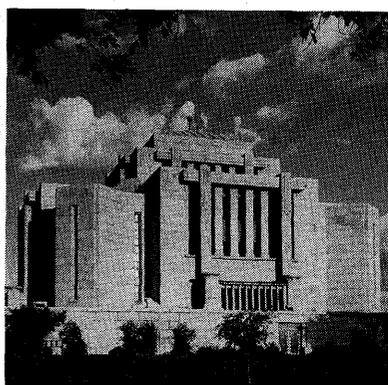
## アイダホフォールズ神殿

スネーク川沿いで、この市の名の由来となった滝を見晴らす景色のよい所に、美しいアイダホフォールズ神殿が立っている。この神殿用地は、アイダホフォールズの住民から寄贈された土地である。

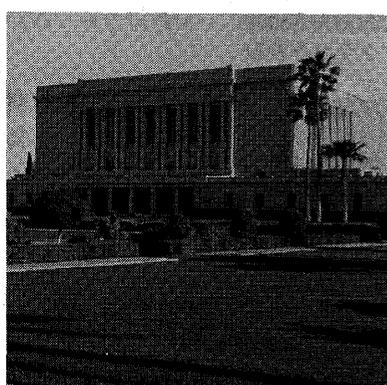
この神殿の建築工事は1939年に開始された。基盤は堅い火山岩で神殿には理想的であった。建物は昼は太陽の光を、そして夜は電気の光を溢光として発するように工夫され、塑造の石で上



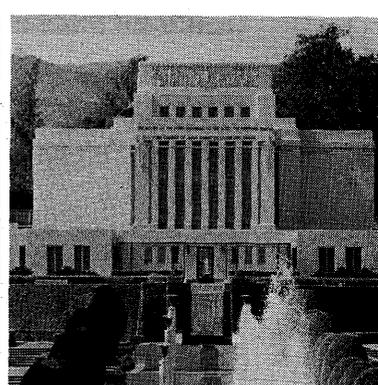
アイダホフォールズ神殿



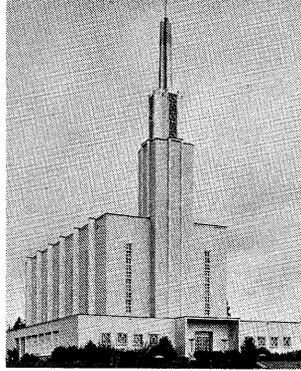
アルバータ神殿



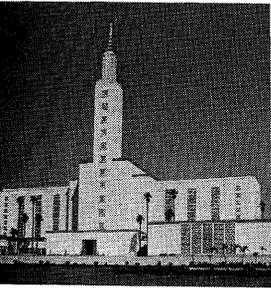
アリゾナ神殿



ハワイ神殿



スイス神殿



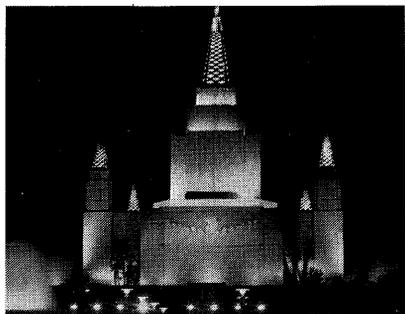
ロサンゼルス神殿



ニュージーランド神殿



ロンドン神殿



オークランド神殿



オグデン神殿

張りされている。両側はスネーク川にその姿が映し出される。神殿の中央部は大きな塔になっており、高さ約50メートルで大空にそびえ立っている。

この神殿はアイダホ、ワイオミング、モンタナに住む大勢の教会員が利用している。この地域の町の多くは、ユタ出身の末日聖徒が住みついて開いた町である。この神殿は1945年9月23日、ジョージ・アルバート・スミス大管長によって献堂された。

### スイス神殿

1906年の初め、ジョセフ・F・スミス大管長は、スイスのベルンについて次のように予言した。「神の神殿が…地上の様々な国々に建てられるときが来るであろう。」それから半世紀ほど経って、デビッド・O・マッケイ大管長は、欧州で最初の神殿がスイスに建てられると発表した。

この神殿はベルン近郊の風光明媚なゾリコーフェンの地に所在しており、その敷地は約2.8ヘクタールである。しかしこれは以前に建築されたどの神殿よりも規模は小さい。この神殿の金色の塔は、約43メートルの高さで空にそびえ立っている。他の部分はクリーム色がかかった灰色で、白色の鉛直の柱を持つ。

神殿の献堂式は1955年9月11日、マッケイ大管長によって行なわれ、様々な言語を話す国々の聖徒のために使われることになった。特に神殿が身近にあり、いろいろな言語で儀式が行なわれるため、欧州の聖徒にとっては大きな喜びであった。

### ロサンゼルス神殿

「やがて主の神殿から太平洋岸を見おろすようになるであろう。」ブリガム・ヤングとウイラード・リチャーズは、1847年にカリフォルニアの聖徒にこう書き送った。

今日、サンタモニカ通りのウエストウッドビレッジの広さ5.3ヘクタールの丘に、この神権時代に教会が建てた

最大規模の神殿、ロサンゼルス神殿がある。建物は約111×74メートルの4階建てで、延べ面積は約1.8ヘクタールである。神権会の開かれる集会所は3階にあり、その面積は24×82メートルで地上約10メートルである。

この神殿の頂には天使モロナイの像があり、その像までの高さは約78メートルである。この像は丈が約4.6メートルで、その手に長さ約2.4メートルのラッパを持っている。

献堂に先立って、約66万2千人の人々が神殿の内部を見学し、教会の話と神殿の目的について説明を受けた。

神殿の献堂は1956年3月11日、デビッド・O・マッケイ大管長によって行なわれた。

### ニュージーランド神殿

福音がニュージーランドのマリオ人の間に彼らの言葉で伝えられたのは、1881年のことである。この地での伝道は大きな成功を遂げ、マオリ人以外のニュージーランドの人々から、教会はマオリ人のためだけにあると時折誤解されるほどになった。1887年までにニュージーランドの教会員数は2,573名になったが、その内の2,243人はマオリ人であった。今日、ニュージーランドのふたつの島における教会員は、約3万5千人である。

南太平洋の諸島とオーストラリアの教会員のために神殿計画が発表されたのは、1955年である。ハミルトンから8キロほどのツヒカレミアのある丘が選ばれた。美しい白い建物は、そのデザインも規模もスイス神殿やロンドン神殿に似ている。この神殿を建てるにあたって、アメリカから建築請負い人が労働宣教師として召され、彼らがニュージーランドや南海諸島から召された若い労働宣教師を指導した。

神殿は1958年4月20日、デビッド・O・マッケイ大管長によって献堂された。

### ロンドン神殿

1830年に教会が設立され、その7年

後、英国に福音が宣べ伝えられた。そして英国で改宗した大勢の人々は、アメリカで苦闘している新しい教会の地位を高めたのであった。

後に彼らは自分自身の土地に教会を築くように促され、現在グレートブリテンには、7つの伝道部と14のステーク部があって全盛をきわめている。第2次世界大戦後、ロンドンから約40キロの所にある。サリー県ニューチャペルで、神殿用地が購入された。そして1955年に建築工事が始まった。この近代的な建物は、鉄筋コンクリートと構造用鋼で作られ、白色セメントの仕上げ石で上張りされている。この神殿は1958年9月7日に、デビッド・O・マッケイ大管長によって献堂された。

### オークランド神殿

「主の壮大な白色の殿堂はあれらの丘を飾り、国々の栄えある旗となるであろう。」これは、ジョージ・アルバート・スミス大管長が十二使徒評議員会の一員であった1924年に、サンフランシスコ・イーストベイの丘を眺めながら語った予言である。

彼が予見したその土地は1942年に購入された。湾全域と太平洋を一望に見渡せる、5階建てのみごとなオークランド神殿の建築は、1962年5月に開始された。この建物は、基礎から塔まで白色の花崗岩で上張りされている。中央の塔はその高さが約52メートルで、このほかに約29メートルの塔が4つある。これはすべて打抜きになってお

り、青色のガラスモザイクと金泊で覆われている。夜になると塔は内部から照明され、光が幾筋かの糸のようになって輝き出すようになっている。また、神殿の南北の外壁には彫刻画がある。そのひとつはパレスチナにおける救い主で、他方はアメリカのニーファイ人を訪れた主の彫刻である。

この神殿は1964年11月17日にデビッド・O・マッケイ大管長によって献堂された。これはマッケイ大管長が献堂した第5番目でかつ最後の神殿である。

### オグデン神殿とプロボ神殿

教会のすべての神殿儀式の内の52パーセントは、13の神殿の中の3つ（ソルトレーク、ローガン、マンタイ）で行なわれていたことが、1960年代の調査で明らかになった。そこで、これら3つの神殿の負担を軽くするために、ユタ州の人口濃密な地域にさらにふたつの神殿を建てることと決定された。

こうして、オグデンのタバナクルスクウェアがその地域の神殿用地に選ばれ、地域の約13万5千人の教会員のために使われることになった。もうひとつはプロボである。ブリガム・ヤング大学の北東で、大学から歩いて行ける、ロックキャニオンの入口近くに用地が選ばれた。

これらふたつの神聖な建物の外観がかもし出す美しさはことのほか印象的である。両方の神殿共内部の設計は同じであるが、外部は異っている。しかし形は似ており、共に光沢ある塑造の

石できている。プロボ神殿の石は浅い浮き彫りの花を型取った作りで、高さ約55メートルの塔にもそれが生かされている。オグデン神殿の石は縦みぞの外観を呈し、空隔には装飾用の金属格子がほどこされ、塔も縦みぞ作りで、その効果は実に印象的である。

これらの神殿は地下1階、地上3階で、欧州の神殿よりは大きいのが、オークランドやロサンゼルス神殿ほど手が混んではない。オグデン神殿は1972年1月18日に、そしてプロボ神殿は1972年2月9日にジョセフ・フィールディング・スミス大管長によって献堂された。

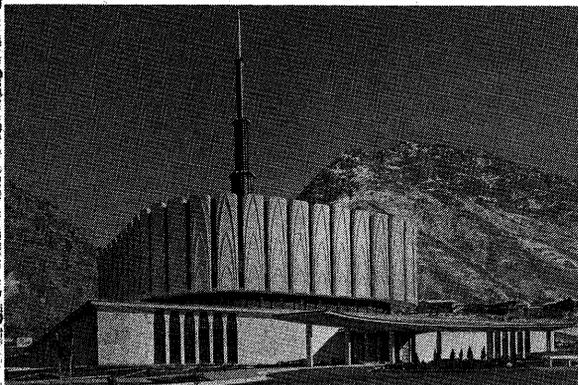
### ワシントン神殿

「神殿の中の宝玉」これはこの神殿の建築許可を下すときにデビッド・O・マッケイ大管長が語った言葉である。この神殿は教会が建てた第17番目の神殿である。7階建てで6つの尖塔を持ち、今日全世界に当教会のシンボルとして知れ渡っているゴシック様式のソルトレーク神殿を近代的にした形である。また、大理石で上張りした最初の神殿でもある。最も高い尖塔には、丈が約5.5メートル、重量2トンの、金泊をほどこされた天使モロナイの像が立ち、地上約89メートルにそびえている。

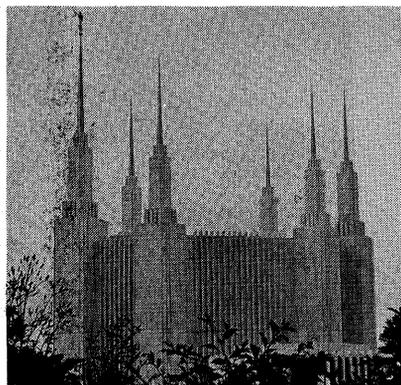
そこにはワシントンD. Cの郊外、メリーランド州モンゴメリー郡の最も高い地点に位置し、約23ヘクタールの面積を持つ。そのため、ワシントン周辺のハイウェイから様々な角度でこの神殿を眺めることができる。神殿の規模はソルトレーク神殿の3分の1ほどである。

鉄入れ式は1967年12月7日に行なわれ、用地の整備は1971年5月28日に開始された。献堂は1974年末に行なわれる予定である。

この神殿はミシシッピ川より東に住む合衆国の聖徒と、東部カナダの聖徒のために使用されることになる。



プロボ神殿



ワシントン神殿



# なぜ神殿を？

十二使徒評議員会会員  
ゴードン・B・ヒンクレー

「人生の疑問に永遠の解答を与える場所は、地上には数少ない」

静かに自己を見つめるとき、生命の厳粛な神秘に思いをはせない人が、はたしているだろうか。彼はこう問いはしないだろうか。「誕生以前の自分はいったいどこに？ どうして今この地上にいるのか。死んだらどうなるのか。創造者と私との関係は？ 死はまわりの人々との訣別のだろうか。妻や子供はどうなるのか。死後別の世界が存在するのだろうか。存在するとすれば、そこでは親しい人々に会えるのだろうか」と。

これらの疑問の解答は、人の知恵で見いだせるものではない。それは啓示された神のみ言葉の中にも見いだされるのである。末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿は、そのような疑問に解答を与えてくれる神聖な建物である。神殿は皆、世から隔離された神聖な平安の場、主の家として奉獻され、そこでは真理が教えられ儀式が行なわれる。そして人々は、そこから永遠の事柄に関する知識を得、神の子供として自分に受け継がれている神聖なものを知り、永遠の存在である自分の可能性を念頭に置いて生活することを決意するのである。

合衆国の首都ワシントン郊外に最近完成した堂々たる神殿は、教会の手になる16番目の神殿である。世界中に散らばる一般の礼拝堂とは違ったこれらの神殿は用途と機能において教会のどの建物とも趣を異にする。独特なのは建物の大きさでも建築美でもない。内部で行なわれていることなのである。

ワシントン神殿に加えて、合衆国西部

とハワイ、カナダ、ニュージーランド、英国、スイスに末日聖徒の神殿がある。そのほか、教会初期の時代にふたつの神殿が建てられたが、無情な偏狭の中で末日聖徒はあちこち追いたてられ、やむなくその神殿を放棄した。

一般の礼拝堂とは区別して、特定の建物を特定の儀式のために設けることは、目新しくない。それは古代イスラエルでも行なわれていた。イスラエルの民はいつもは会堂で礼拝したが、さらに神聖な場所として、最初に荒野に至聖所を内蔵した幕屋を造り、次いで神殿の数々を建て、その中で特別な儀式を行ない、ある資格を持った者だけがその儀式に参加できた。

それは現在も同じである。末日聖徒イエス・キリスト教会は、神殿を奉獻する前に一般人を招き、内部全般を見学してもらう。しかしいったん奉獻されれば神殿は主の家となり、非常に神聖なためにふさわしい教会員しか入る許可が得られなくなる。それは、秘密なのではなく神聖だからなのである。

私たちは神殿の儀式を通じて、神の子供である人間、そして創造の業に関する神の永遠のみこころを知ることができる。その大半は、私たちの属する神の永遠の家族と地上の家族に関することである。また結婚誓約と家族関係の神聖さや永遠性をも教えてくれる。

地上に生を受けるあらゆる人間が、神聖な何物かを付与された神の子供であることもはっきり教えられる。このような

基礎的、根本的な教えを繰り返すことで、それを受ける者は有益なものを得る。参入者は、美しく印象的な言葉で語られた教えを耳にし、全人類が天父の家族に属する天父の子供であり、兄弟であることを理解するのである。

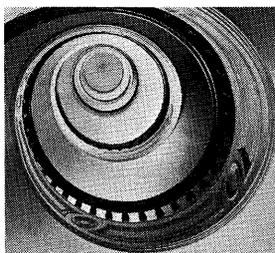
救い主は律法学者に「すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか」と聞かれたときにこう答えられた。「『……心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。第二はこれである『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ』…。」  
(マルコ12:28, 30, 31)

近代の神殿の中で示される教えは、この一番大切な人の義務、すなわち創造主と兄弟とに対する義務に重点を置いている。そして数々の神聖な儀式は神の家族という高邁な哲学を敷衍したものである。また死ぬべき体と対照的に、私たちの内なる霊が永遠であることも教えられる。さらに、その儀式によって大いなる真理が理解されるばかりか、神を愛し、天父の子供たちとなおいつそう睦み合おうという決意が与えられるのである。

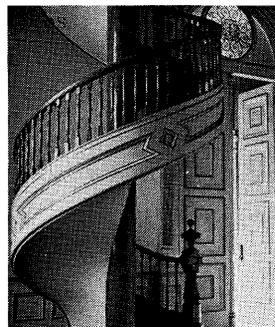
人が神の子供であるという前提に立つと、人生に神聖な目的が生じる。主の家ではそのことに関しても啓示による真理が教えられる。この世での生活は、永遠の旅の一過程である。私たちは地上に来る前は霊の子供として生活していた。聖典にはそれを証するものとして、エレミヤに対する主のみ言葉が載せられている。「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の予言者とした。」  
(エレミヤ1:5)

私たちはこの世の両親の子供として、その家族に生を受ける。両親は、神の子供たちに関する永遠のみこころを成就するため、神の助けを得て働く。家族がこの世にあっても永遠にあっても最も重要かつ神聖な制度である理由はこのにある。

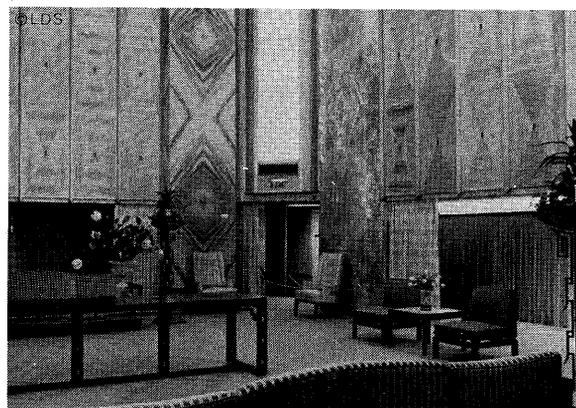
神殿内で行なわれることの大半は、家族に関係している。私たちはこの世に生



マンタイ神殿のらせん階段



ソルトレーク神殿のらせん階段



オークランド神殿の日の光栄の部屋



まれる以前に神の子供として存在していたが、死後もなおそのような状態を続けるだろう。この世における満ち足りた人間関係の中で最も深く美しいものは家族の中に存在し、私たちはそれを次の世に携えて行くことができる。この考えが、神殿の目的を理解する根本である。

主の家に来て祝福にあずかる夫婦は、この世だけでなく永遠に結ばれる。国の法律によって死がふたりを分かちまで結ばれるばかりか、地で結ばれたものが、神の永遠の神権によって天においても結ばれるのである。こうして結婚した夫婦は、祝福にふさわしい生活をしたならば、自分たちの関係や子供たちの関係が死によって終わらず永遠に続くという確信を、神から与えられる。

女性を真心から愛した男性、男性を心から愛した女性で、ふたりの愛が死後も続くことを願わなかった人はいるだろうか。子供を亡した両親で、次の世で再び子供とまみえることを願わなかった者はいるだろうか。人生の最も貴重な属性は愛であり、その一番の発現は家族関係である。永遠の生命を信じる人の中で、天の神が息子、娘に対して、この愛を否定されると信じることが出来る人はいるだろうか。いないはずである。理性は家族関係が死後も続くと宣告し、人の魂はそれを願う焦がれる。天の神はその実現の方法を啓示された。主の家の神聖な儀式がそれである。

しかし、もしこれらの儀式的祝福が、現在末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となっている人だけに限られるとしたら、どれもみな利己的と思われる。だが実際は、神殿に来て恵みにあずかる機会が、これから先福音を受け入れ、バプテスマを受けて教会に入るすべての人に開かれている。そのため、教会は世界に大規模な伝道計画を推進し、可能な限りこの計画を広げようと努めている。神よりの啓示の下、「あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民およびあらゆる人々」に福音を教えることは、教会の責任だからである。

ところが、かつて地上に生を受けながら、福音を聞く機会のなかった人々が無数にいる。彼らは、教会の神殿で得られる祝福を受けられないのだろうか。

この世を去った人々は、死者の代理の生者を通じて、まったく同じ儀式を受けることができる。死者のために地上で行なわれるバプテスマ、結婚、家族の結び固めなどの儀式を、霊界にいる当人たちは受けるも拒むも自由である。主のみわざに強制はない。あるのは機会である。

この代理の仕事は、死者に対する生者のたぐいなき愛の仕事である。そのためには、すでに世を去った人々の身元を確かめる大がかりな系図探求が必要である。その系図探求を援助するために、教会は系図計画を立て、世界に類を見ない探求のための設備を整えている。記録保管庫は一般公開され、非教会員の先祖探求にも役立つ。この計画は全世界の系図学者から賞賛を受け、歴史記録の保管庫として各国に利用されている。しかしその本来の目的は、自分たちが得ている祝福を死んだ先祖にも広げるために、先祖の身元を明らかにする資料を教会員に提供することである。教会員はこうに考える。「自分が妻子を愛して永遠に一緒にいたいと思うなら、祖父や曾祖父や、そのまた先祖たちも、同じ永遠の祝福を受ける機会があってもよいのではないかと」。

このように、数ある神聖な建物は、静かに敬虔に推進される膨大な活動の場である。それは黙示者ヨハネの記録した質問と返答のあの示現を思い出させる。「……『この白い衣を身にまとっている人々は、だれか。また、どこからきたのか』……『彼らは大きな患難をとって来た人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。……』」(黙示7：13-15)

この聖なる宮居に来る人々は、中に入ると白い衣を身にまとう。彼らは皆、地域の教会指導者から資格があると認められ

推薦を受けて来る。彼らは清い心と清い体と清い衣をつけて神の神殿に入るよう求められるのである。中に入るときは、世の物事をあとにして、神についての事柄に集中しなくてはならない。

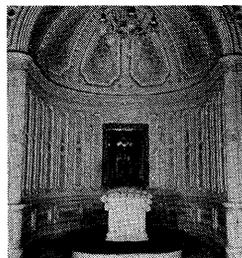
この札押(もしもそのように呼べるとしたら)には報いが伴う。この緊張の時代に、時々世を離れて主の家に入り、そこで静かに神に関わる永遠の物事に思いをはせたいと思わない人があるだろうか。この神聖な場所では、他のどこからも得られない機会が与えられる。そこでは、人生の本当に大切な物事を知って、思いをめぐらすことができる。神と私たちとの関係や、前世からこの世に続き、さらに再び人々とまみえることのできる将来へとつながる私たちの永遠の旅について。私たちは、愛する人々や、自分に体や精神や霊の遺産を伝えてくれた遠い先祖たちとも再び会うことができるのである。

神殿はあらゆる建物の中にあつて異彩を放っている。それは教えの家であり、誓約と約束の場所である。私たちは祭壇で創造物なる神のみ前にひざまずき、永遠の祝福を約束される。その神聖な環境の中で、贖い主、救い主なる御子主イエス・キリストを思い、主と交わるのである。主は私たち一人一人のために犠牲となって下さった。私たちは神殿で、私利を捨て、自分のために働くことのできない人々のために働きをなすのである。かくして、私たちは最も神聖な人間関係に結ばれる。夫と妻、親と子、家族として時も死も越えた絆に。

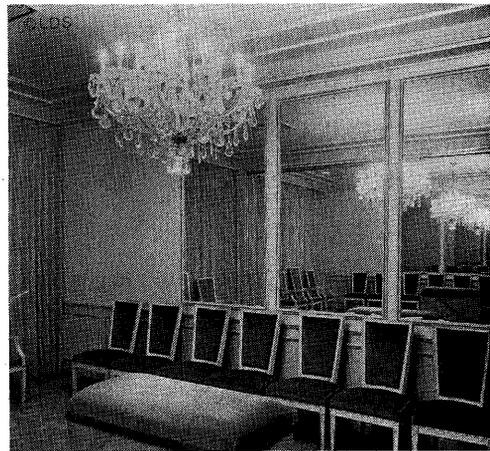
この神聖な建物は、末日聖徒が憩う暇なく迫害によって住み家を転々と変えたあの暗黒の時代にも、建造された。窮乏の時代にも繁栄の時代にも、建造され、守られてきた。確かに神殿は、生ける神と復活された主、そして予言者と神よりの啓示に対して証を持ち、主の宮居における以外に永遠の祝福の安らぎと確信は得られないとする大勢の人々の力強い信仰の所産なのである。



メサ神殿の日の光  
栄の部屋



マンタイ神殿の結び固  
めの部屋



オグデン神殿の結び固めの部屋

両親は私たちを神殿に連れて行ってくれました

ブレンダ・ブрокサム

「私たちのワード部では、家族を永遠に結び固めることに力を置いているんですよ。神殿のことに ついて勉強するクラスに出席してみませんか。」この言葉が、私の家族の新たな生活のスタートとなりました。

愛する隣人であるホームティーチャーが私たち家族が福音から離れないように絶えず助けて下さり、その土台を据えて下さっていました。そんなある日、監督と副監督が、私の父に話をしに来られました。「いかがですか。このクラスに出席なさいませんか。」彼らはチャレンジしました。

一瞬沈黙があって、それから父は静かに、「はい、出席しましょう」と答えたのです。

まだ子供ながら、私は両親が口論するたびに怒りと心痛とつらさを感じていました。理想とかけ離れた現実に、ひとりで泣いたこともよくありました。

家族が福音によって結ばれている友人の家庭がどんなに違っているかを、感じることもできました。私の家族はばらばらだったのです。母は教会に活発ですが、父はそう

ではありませんでした。教会のために多くの時間を費やすことで、口論や鋭い言葉のやりとりがありました。教会の集会から帰ったら いったいどうなることか見当もつかずに、とても心配でした。沈黙の中から聞こえてくる言外の言葉の冷たさを味わうのだろうか、それとも父の嘲笑に満ちたまなざしだろうか。そんなふうを考えていると、教会で受けたすばらしい感動も、次第に空しく消えていくのでした。

けれども、監督に聞かれて父がはいと答えたときから、福音はゆっくりと私たちの生活を変えていきました。ほとんどわからないように、徐々に浸透していきました。口論は少なくなり、ずっと遠のいていきました。父母の言い合いの見られない日が2日、3日と続きました。そしてそれが何週にもなったとき、私たちは愛というものを知り、愛を感じるようになりました。

以前には、私たちは不安顔に悲しげな目つきで、「今晚プライマリーで歌を歌うの。教会に来てわたしの歌を聞いてちょうだい」とか、「きょうは一緒に教会に行つて。お願いだから」と頼んだものでした。でもだれかがバプテスマを受けるとか祝福を受けるといふ以外は、返事はいつも「行かない」

でした。それがある晩、もう頼む必要はなくなったのです。初めて家族そろって教会に出席できる晩の、はやる心でいそいそと胸を躍らせながらの支度は楽しいものでした。もちろんのこと、胸の思いも複雑でした。ワード部の人たちはどんなふうに接して下さるかしらと。でも心配は無用でした。教会員は理解して下さいました。

私たち家族は教えられた通りの生活をする責任を感じました。特にそのときは目ざす目標がありました。急いでいて荒々しい言葉を使ってしまっても、私たちはおだやかに心から愛をもって言葉を返しました。ぐずぐずとした態度が熱心な態度に変わりました。お互いに助け合う喜びも感じました。父母がいつも口をすっぱくして言われていた仕事も静かにてきぱきとスムーズに運びました。以前はお互いへの憎しみとプライドでいつもけんかをしていたのに、それが愛や手伝いたいという気持ちに変わりました。

何がそう変えたのでしょうか。いろいろなことがあります。きっとそれは、長く待っていた夢が現実になったせいでしょう。家族の祈りと家庭の夕べが生活に取り入れられてから、私たちはお互いを知り、お互いを愛することを学びました。そのような生活によって、

私たちの証は大きくなりました。家族の祈りや聖典の勉強や家庭の夕べや教会に出席することの証が。中でも一番の証は、悔改めの原則についてです。私たちは神様が生きておられることを知りました。しばらくして、その証と自分たちはふさわしいという確信が持てたとき、主の神殿に行ってこの世においても永遠にわたっても家族として結び固められる用意ができました。

その前夜は、幸福感をわくわくした気持と不安でいっぱいでした。本当に神殿に行けるのかしらと、夢のようでした。私たちはそのひとときを最後の準備に費やして、髪を巻いたり、神殿衣を点検したりしました。母は14歳から1歳2ヵ月まで6人の女の子全員に、服を作ってくれました。

翌朝、父は4時に起きて牛の乳しぼりをし、餌を与え、朝の仕事を全部すませて、家族は5時半に

出発しました。

神殿の門に足を踏み入れたとき、私はのどにこみあげてくるものを感じました。一瞬ためらいがあった、それから私たちは中に入りました。私たちは子供の部屋で何時間か過ごしてから、付添いの人に連れられて結び固めの部屋へ行きました。そこには、神殿衣をつけた父母が顔を輝かせて待っていました。私たちは手を握り、祭壇のまわりにひざまずきました。付添いの人が赤ちゃんを抱いて、赤ちゃんも家族の輪に入れるようにして下さいました。

それから、家族をこの世と永遠に結び固める言葉が話されました。

私は父母に愛されていることがわかります。なぜなら、私を永遠にも自分に結び固めてくれたからです。傷あとを癒すのは愛以外に

## 日々の恵み

末日聖徒一人一人の胸には福音に従い、主を愛することによって得た日々の経験が刻まれているものです。今月は、世界中の聖徒から寄せられた、神殿の仕事の喜びについて数多くの証の中から、幾つかを取り上げます。神殿事業は家族や家庭を祝福し、祈りに答えを与え、福音の原則への理解を深め、人の心を平安と幸福で満たしています。

聖徒の道では、全世界の聖徒と分かち合うため、信仰の励みとなる投稿文を広く募集しています。下記の宛先に原稿をお寄せ下さい。

〒106 東京都港区南麻布  
5-10-25 中正堂会館  
末日聖徒イエス・キリスト教会翻訳事業部  
八木沼修一



## 日々の恵み

何があるでしょうか。あの苦しかった年月はもううっすらと忘れかけています。でも私たち6人の姉妹とひとりの兄弟の心には、神殿を出たときの両親の顔に浮かんでいた喜びが強く刻まれているのです。

ブレンダ・プロクサム 「エンサイン」  
の秘書、ソルトレーク・エミプレーションステーク部第21ワード部の日曜学校教師でもある。

「ある日神殿の中で……」

クリスチーナ・ルボン

私は神殿に行くたびに、日常の問題に立ち向かう新たな力を受けます。それに、神殿は敬虔さや神聖さや従順、秩序、権威の尊重、兄弟愛を一番経験できる場所なのです。

ある日神殿の中で、私は本当の女性らしさとは何かということや、女性はどの点をとっても決して男性に劣ってはいないことをはっきり

りと理解しました。女性には最も大切に神聖な別の召しがありますから、男性をうらやむ理由は何もありません。

シオンの山に上って救い手となることは、私にとって特別の意味があります。神殿で死者のために働くことは、愛と犠牲の一番純粹な姿だと私は思うのです。

クリスチーナ・ルボン フランスのパリにある教会翻訳事業部のフランス語コーディネーター。

あのすばらしいひととき

シプアウ・マトウアウト

私は結婚するまでは聖なる神殿に入りたと思っていなかったの、主の宮居に入ろうという決心は急なことでした。とても重大なことが起きたのです。私の母が、神殿に行って自分のエンダウメントを受けて父と結び固められる前に、他界したのです。

ある晩、私が部屋でひとりで勉強していると、静かな声が繰り返しささやきました。「すぐにお母さんのために神殿の儀式を行わなくてはならない」と。初めはその言葉を無視しました。でもその声はだんだん大きく聞こえてくる

のです。

ついに私は自分の勉強をやめ、その小さな声の告げる言葉を真剣に考え始めました。神殿に入る資格はあると感じました。でもそのあと、誓約を守り続けることができかどうか心配でした。そのため、私は主に導きを求めました。

ひざまずくと、悲しいからではなく、しみ通るようなみたまのやさしさを感じて、祈りながら泣きました。恐れは消えて、信仰と勇気が生まれました。立ち上がるとすぐに、うながされるようにして、監督に電話をしました。

教会の方針では、女性は伝道か結婚をしないうちは神殿に入ることを勧めていないので、許可が下りるまで何週間も待たなくてはなりませんでした。私はその期間を、精神的、霊的な準備に使いました。また、母の儀式に備えて、必要なファミリーグループシートを作成しました。

やがて監督とステーク部長から最終的な指示が来て、神殿に入りました。宮居に入るとは、何とすばらしい祝福でしょう！目と耳と心がいっぱいに開いて、教えを吸収しました。私は一つ一つの誓約を、体の骨という骨、繊維という繊維で実感しました。主と誓約を交わすたびに、主のみ前に立っているように感じました。主のみ力

は非常に大きくて、セッションが  
終わっても、帰りたいとは思  
いませんでした。そのとき私  
は、自分が世にありながら世  
のものではないことをはっき  
り知ったのです。

その4週間後、私は母のため  
に神殿に入りました。それも  
また、すばらしい経験でした。  
エンダウメントのセッション  
を受けているときに母の存在  
を感じ、両親のために結婚の  
結び固めが行なわれたときは  
、祭壇の所に文字通り両親  
がいると感じました。部屋  
の中には聖霊の影響が満ちて  
いて、両親に結び固められ  
る間、私は泣きませんでした。  
私は本当に両親との再会を  
経験しました。その日から、  
両親の存在があまりにも身  
近に感じられて、死んだのが  
そのように思えます。

神殿は本当に祈りの家、み  
たまに関するより高度な知  
識を与えてくれる家です。私  
は心に疑問が生じると、いつ  
も正しい答えを受けに神殿  
に行きます。神殿の中に入  
ると、天のお父様を訪ねて  
きたのだという気持ちにな  
ります。ですから、心の中で  
天父に申し上げることに集  
中しなくてはなりませんし、  
天父が私に語って下さる言  
葉に注意して耳を澄まされ  
なければなりません。私は  
神殿を愛していますし、神  
殿から受けた祝福を感謝し  
ています。地上でどこへ一番  
行きたい

かといえば、それは神殿です。

シプアウ・マトゥアウト姉妹 教会  
翻訳事業部で翻訳者として働  
き、バナクル合唱団のメンバ  
ーでもある。

「それまでも妻を愛して  
いました。……」

スウェーデン伝道部副伝道  
部長 G・ウェナーランド兄弟

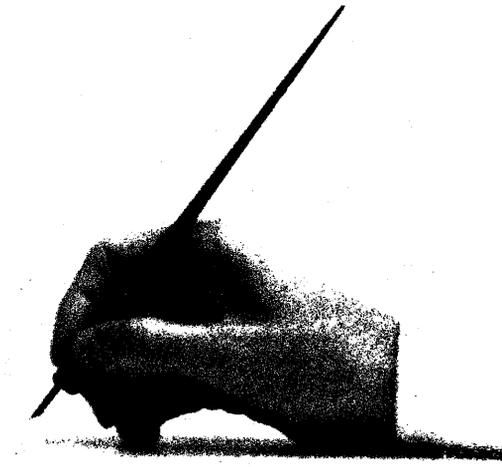
私は1949年にバプテスマを  
受け、妻はその後4年たって  
から教会員になりました。ス  
イス神殿が献堂された1955  
年には家族は7人になってい  
て、旅費の見積もりは負担  
できる限度を越えました。妻  
のモードと私はひざまずいて  
、道を開いて下さいと願いま  
した。するとその1ヵ月後、  
会社の社長が私を呼んで、  
仕事ぶりが気に入ったので  
給料を大幅に上げてくれる  
ことになりました。そしてその  
夏、私たちは初めて主の宮  
居に行きました。

初めて神殿を訪れた際に私  
の胸を満たした、喜びと幸  
せ、それに福音を守ろうとい  
う決心は、決して忘れられ  
ません。以前には思っても  
みなかった、自分の永遠の  
将来への展望と知識が与え  
られました。家族がこの世  
においても永遠の世にあつ  
ても結び固められたと

きは、一番印象的でした。

祭壇越しに妻の目を見つめ  
ると、幸福の涙がほおを伝  
っていました。私はそれま  
でも妻を愛していました。し  
かしあのお父様からの愛ほ  
どではありませんでした。神  
の娘である彼女は、私の子  
供たちの母親なのです。そ  
れは、以前にはまるで理解  
していなかったことでした。  
その後私たちの祈りはもっ  
と深くなり、主をさらに愛  
し、主に仕えることがもっ  
と好きになりました。

私たちは神殿にずっと詣  
でています。神殿の儀式と  
神殿にある雰囲気が大スキ  
だからです。神殿に入るた  
びに、交わした誓約を思い  
出しますが、それが、福音  
に従って生活を続ける一番  
の原動力となっているので  
す。





# 一輪の花

マリア・シリング

ロレーヌ地方はドイツとフランスの国境沿いにあつて、長い間両国の間で争いの的となつてきた所です。距離感を感じなくなった今日、地図上ではごく小さな一地点にすぎません。しかしロレーヌは歴史豊かな地方で、墓や遺跡がたくさんあります。また昔の出来事をもとにした歌もあります。かつてロレーヌではたくさんの兵士が命を亡くしました。

ロレーヌの首府はメスで、その建設はローマ時代にさかのぼります。当時ロレーヌはヨーロッパ最強の要さい都市でした。その様子は多くの石の壁からしのべれます。西の方から流れてくるモーゼル川はこの町でふたつに分かれ、町の大部分はこの川に囲まれています。たくさんの橋や渡し場があつて、町の美しさはまた格別です。

町の東の方、モーゼル川が再び合流するすぐ手前に墓の島という小さな島があります。ここには、戦争に備えて穀物をいっぱい貯えた倉庫や、火薬庫、軍需工場がとなり合つて建っています。そして島の端に向かつて島の名前の由来となつた3つの墓地—市墓地、ユダヤ人墓地、軍人墓地があります。島の最端には巨大な木の十字架が立っていて、生きるためのパン、破壊用の武器、死んだユダヤ人、クリスチャン、兵士用の墓というこの奇妙な組合せを見おろしています。

ロレーヌは1847年以來ドイツ領でしたが、第一次世界大戦が終わつて、今や再びフランスのものとなりました。町の看板の字は変わりましたが、人々は生活を続け、もう一度平穏な状態を取り戻そうと歩み出しました。11月1日、先祖の墓を飾る万聖節の日が近づいてきました。私たちはその前日、家族や友人の墓を飾るため墓地に出かけました。そして軍人墓地に、手入れのゆき届いた古い墓のほかに、新しい墓の列が続いているのが見えました。それはこの数ヵ月にわたる戦争中に軍の病院で亡くなった兵士たちの墓だったので、それぞれの墓には木製の小さな十字架がつけてあり、松の枝が整然と並べられていました。しかしそこには一本の花も花輪もありませんでした。敗戦国ドイツの亡き兵士の家族が、今はフランス領となつたこの墓地に花をさしむけたり、ましてや墓を飾るなど、とうていできないことだったのでした。

しかしそのような状態にありながらも、人々は万聖節を迎え、墓地を訪れる人々が続々とやってきました。そして軍人墓地を訪れた人々は、新しい墓のひとつひとつに切つたばかりの生き生きとした花がおかれているのに気づきました。私の母が庭に美しく咲きほこつていたアスターと菊の花を全部切つて朝早く墓に持つて行つたのでした。

小さな行ない？ そう、小さな行ないかも知れません。しかし一瞬のきらめきが光を放つように、ありふれたほんの小さな愛ある行ないは世の人々の心を打つのです。それから20年後、母はこの万聖節とほとんど同じ日に第二次世界大戦でふたりの孫息子を亡くしましたが、ロシアのどこかに心をこめてこのふたりの墓を見守ってくれる母親がいたのではないかと、私は確信しています。



# 信 仰



## お父さんの言葉を思い出して

ウインタークォーターズにある小さな丸太小屋は、すっかりできあがっていませんでした。けれども、オルソン・スペンサーと6人の子供たちは、とにかくそこに引越しました。お父さんはこの町に着く前に、ブリガム・ヤング大管長からイギリスに行って教会の新聞を出版するよう召されていたのです。そこでみんなはお父さんがイギリスにたつ前になんとかして落ち着きたいと思っていました。

14さいになったばかりのエレンと、12さいのオーレリアは、お父さんから4人の妹や弟たちの「お母さんがわり」をするようにと、言われていました。一番年下のルーシーはまだ3つでした。それなのに、お母さんはノーブーをたつとまもなく死んでしまったのです。それでお父さんは子供たちをつれてミズーリ州を渡りました。ウインタークォーターズに着くとお父さんは急いで小屋を建て、なるべく早くイギリスに出発できるようにしました。

それから牛乳を8頭買い、子供たちがミルクを十分に飲むように、また余ったぶんを売ることができるようにしておきました。それに馬が1頭いるので、これを売って食べ物を買うこともできます。

秋も深まったころ、お父さんはみんなに別れをつけて出かけて行きました。そのとき、ふたりの女の子はやっと病気がよくなったばかりでした。近所の人たちも必要なときには助けてくれると言ってくれました。

やがて長く寒い、さみしい冬がおとずれ、たくさんの方が死んでいきました。その中には子供たちの友だちも何人かいました。

オーレリアは日記の中にこう書いています。「はじめのころはかなり楽だった。けれども今年の冬はいつになくきびしい。馬は死に、牛も1頭を残してみんな死んでしまった。だから、ミルクもチーズもない。たくわえはほとんど底をついてしまったので、春と夏は食べ物にとっても困った。この間、

つぶしとうもろこしを水でこねて、焼いたものしかなかった。夕食を食べないでねたことが何日もあり、まずい食事でも食べられるようになかなかペコペコになるまで待った。

1847年の秋も終わりに近いころ、ブリガム・ヤング大管長がスペンサーの子供たちのところにやってきました。家の中は片づいており、子供たちもきちんとしていました。お父さんがイギリスに行ってから1年あまりたった頃のことでした。聖徒たちは翌年の春西部の山に移る準備にとりかかっています。

子供たちはヤング大管長に、お父さんからしばしば手紙がきて、何を着たらよいか、どのように髪を整えたらよいか、病気になったらどうするか、どのように助け合うかについていろいろ書いてくることを話しました。そして最近きた手紙を持ってきました。ヤング大管長はそれを読むと、「じつは、話したいことがあるんだが……」と言いました。それからこうたずねました。「お父さんがもしもう一年イギリスにとどまることになったら、みんなはどう思うかい。お父さんにしてもらいたいことがまだあるんだよ。」

子供たちは互いに顔を見合わせました。そして一番年上のエレンが話すのを待っていました。「それが一番よいことなら、そうしたいと思います。私たちは一番よいことをしたいと思っていますから」とエレンは静かに答えました。

ほかの子供たちもみんなうなずきました。子供たちは以前お父さんが、「たとえ死ぬようなことがあっても、主を信頼しなければならぬ。そうすれば、すべてがうまくいく」と書いてきたのを思い出したのです。

子供たちはお父さんのことを、またお父さんが手紙に書いてきたその言葉を信じていました。そして天のお父さまを信じていました。こうして1848年の春、スペンサー一家の子供たちは新たな決意をもって喜びにあふれ、ほかの聖徒たちといっしょに西部へ移動する準備にとりかかったのです。

私たちの  
友だち  
すばらしい宣教師

すべての教会員は  
宣教師である

## しあわせなとなり人

ある日、7さいのラムジーは友だちと遊んでいました。するとふたりの宣教師が友だちの家のドアをたたきました。友だちの家族は宣教師たちをまねき入れ、お話を聞きました。その話をいっしょに聞いたラムジーはとてもすばらしいことだと思ったので、自分の家に来てお父さんとお母さんにも話してくれるようにと、宣教師にたのみました。

ラムジーの家族も宣教師の話聞いてとてもすばらしいと思い、その後何回か宣教師に訪問してもらい、イエス・キリストの福音についてたくさんを学びました。まもなくお父さんとお母さん、それにふたりのお兄さんがバプテスマを受けて教会員になりました。その次の年、ラムジーはもっともすばらしいたん生日を迎えました。

これでいよいよバプテスマを受けることができるのです。（オハイオ州ウエストバージニア伝道部）

## 知恵の言葉

アプイの顔はけがをしたためにはれあがっていました。歯が3本もぬけ、あごにはほうたいをしていました。4日前自転車でころんだのです。それでもアプイは断食日曜日の証会で、神さまは生きていらっしゃり、祈りに答えてくださることを知っていると、あかししました。アプイの美しい心はその場にいた多くの人々の心をうちました。

アプイは教会員になる前から、このホンコンで宣教師の助けがしたいなど、いつも思っていました。はじめお兄さんとふたりのお姉さんがバプテスマを受け、次にアプイが受けました。

今、アプイとお兄さんとお姉さんは、お父さんとお母さんが福音についてよ

く勉強し、教会の会員になれるよう助けるというチャレンジを受け入れて、がんばっています。ホンコンの宣教師たちは、アプイたちの伝道はきっと成功すると信じています。

## 何か美しいもの

カリフォルニアに住んでいる12さいのジュリー・アン・クリステンセンは、ある日友だちのロリ・ボンテンポのところに出かけて行きました。ロリはつい最近同じ通りに引っ越して来たのです。ボンテンポの家族はテーブルを囲んで、いろいろな宗教の話をしていました。そこでジュリーは末日聖徒イエス・キリスト教会について話しました。みんなが教会の教えについて質問してきたとき、ジュリーは信仰箇条を暗唱してひとりひとりの質問に答えました。ジュリーのような小さい女の子がこんなに多くのことを知っているのを見て、

みんなおどろいていました。

そのあと、ジュリーはモルモン経を1冊持って行き、宣教師が教会のことについてもっとくわしくお話したいと思っていることを説明しました。1974年2月9日、ポール、キャロル、ロリ、デビッドそしてお父さんとお母さんがバプテスマを受けました。

「ジュリーは私たちに教会のことを話していたとき、何か美しいものをまき散らしているようでした。ほんとうに霊的なものを感じさせる子供です」と、ボンテンボさんは言っています。

## ドアの前の見知らぬ人

1973年10月26日の夕方、金沢の宣教師たちは戸別訪問をしながら、いつもとちがった暖かい落ちついた気持を感じていました。宣教師たちは小さな庭に足を踏み入れ、「油谷」という表札のかかった家のブザーを鳴らしました。

玄関の戸を開けたのは、その家のふたりの子供、有香と直克でした。ふたりはそこに立っている背の高い人を見てびっくりしました。すると直克はさっと奥の方に走って行ってしまいました。「玄関にだれかいるよ」「あの人たち外人じゃないの」と小声で話すふたりの声が奥から聞こえてきました。

まもなくお母さんが出てきました。するとふたりの宣教師はお母さんに、私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の者です。教会について知りたいと思いませんか、とたずねました。お母さんはそのことをお父さんに話し、宣教師をまねくことになりました。

有香と直克はバプテスマの準備ができるよう、家族を助けたいと思いました。

バプテスマを受けるすばらしい夜がついにやって来ました。直克はうれしきで目を輝かせながら、お父さんとお母さんとお姉さんを見つめました。今、直克はあと何日したらバプテスマを受けられる年になるかを、楽しみに数えています。

## プライマリー宣教師

私の名前はリー・スーリンです。ホ

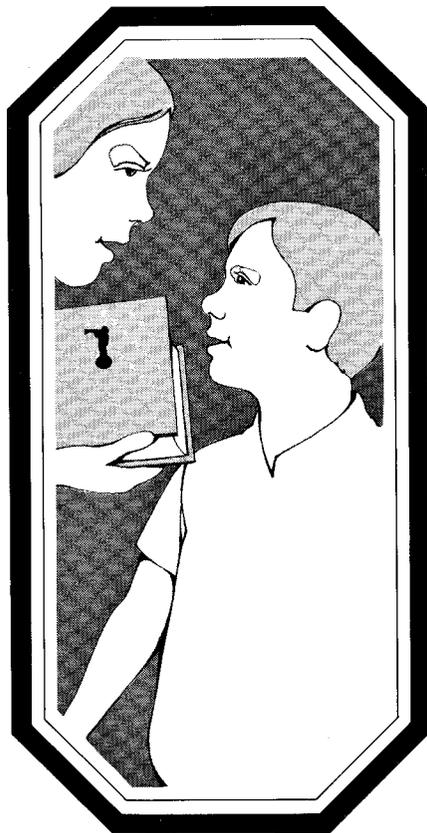
ンコンに住んでいる末日聖徒の女の子です。教会に入ってからまだ5ヵ月ですが、福音がとても大切なことを知っています。そしてこの喜びを学校の友だちにも教えてあげたいと思っています。

私は友だちを教会に連れて行こうと決心しました。プライマリーにいっしょに行こうと思ってさそいましたが、友だちは「仏教の学校に行っているの、あなたといっしょに教会には行けないわ」とことわられてしまいました。

そこで、友だちに教会員にならなくてもいいのよ、と話すと、いっしょに行くと言ってくれました。友だちは天のお父さまの家が気に入ったらしく、天のお父さまの戒めを全部守りたいと言いました。

私もなるべく福音のことを話すようにしたので、友だちの信仰はだんだん強くなり、宣教師にレッスンをしてくれるようにとたのみました。

こうして今ではいっしょに教会の集会に行っています。



## 何ということだろう

ぼくの名前はフィリップ・クルック、9さいです。4人兄弟の一番上です。ほかに弟リッキー7さい、妹ジャンン5さい、クリスチーナ3さいがいます。

3年前ぼくたちはワシントンに引っ越して来ました。ここでお父さんが大学に行き、学位をとるためです。

ぼくの友だちにキャシーという女の子がいて、ぼくをプライマリーにさそいました。お父さんもお母さんもプライマリーに行ってもよいと言ってくれたので、ぼくは何回かキャシーといっしょに行きました。あるとき、プライマリーの会長さんがモルモン経を1冊ぼくにくれました。またお祈りについても勉強しました。そこでぼくは家で食事をするときに、お祈りさせてくれるようにたのみました。

ぼくが最初に責任を与えられたのは聖餐会でした。ぼくの話聞きに家族のみんなも来てくれました。聖餐会が終わったとき、お父さんはお母さんと顔を見合わせてこう言いました。「何ということだろう！宣教師さんが教会についてもっと話したいそうだが、みんながフィリップや私たちにこんなに親切してくれるなら、来てもらわないわけにはいかないな」

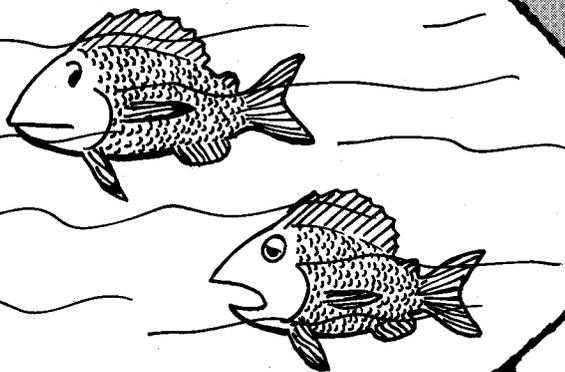
そこで毎週宣教師たちに来てもらいました。宣教師たちが帰るといつも、お父さんとお母さんは日がくれるのもかまわず玄関で話していました。

2ヵ月後、お母さんは教会に入りたいと言いました。でもお父さんはまだ準備ができていないと感じていたようでした。というのも、まだタバコがやめられないでいたからです。しかし間もなくタバコをやめることができ、お父さんとお母さんはバプテスマを受けました。

今ぼくたちは家族がひとつになっていろいろなことをしています。よく家族がこう言うのを耳にします。「教会に行っていない頃は何をしていたのかわからないね」

天のお父さまはぼくたちに何か問題があるとき、それを解決できるように助けてくださいます。ぼくはそのことがよくわかっています。

# おもちゃばこ

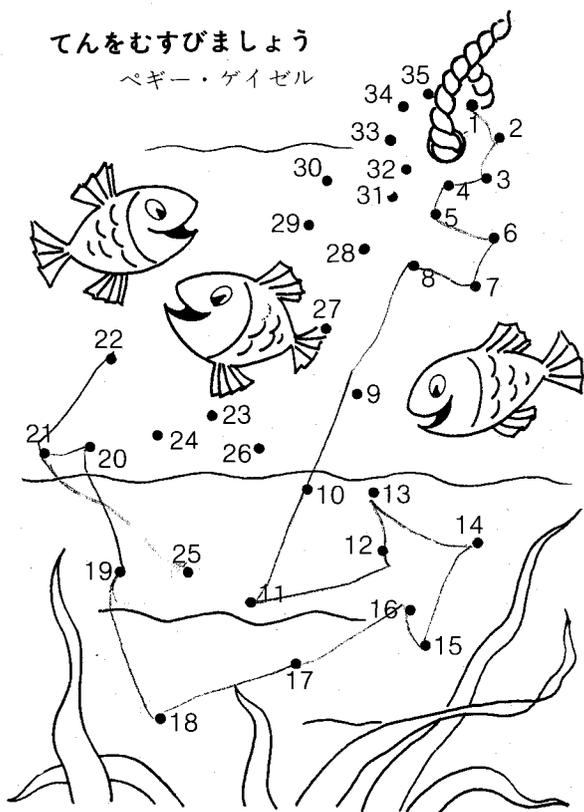


ぼく、波よいした  
みたい。



## てんをむすびましょう

ペギー・ゲイゼル



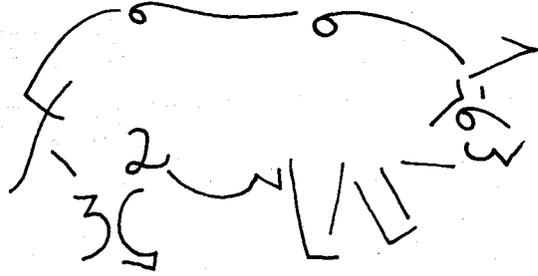
みどりちゃんのでぶ  
くろをさがしましょう  
同じものはどれかな？



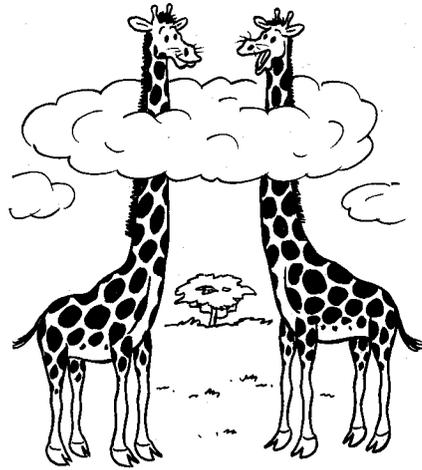
ふたパズル

バイオレット・M・ロバーツ

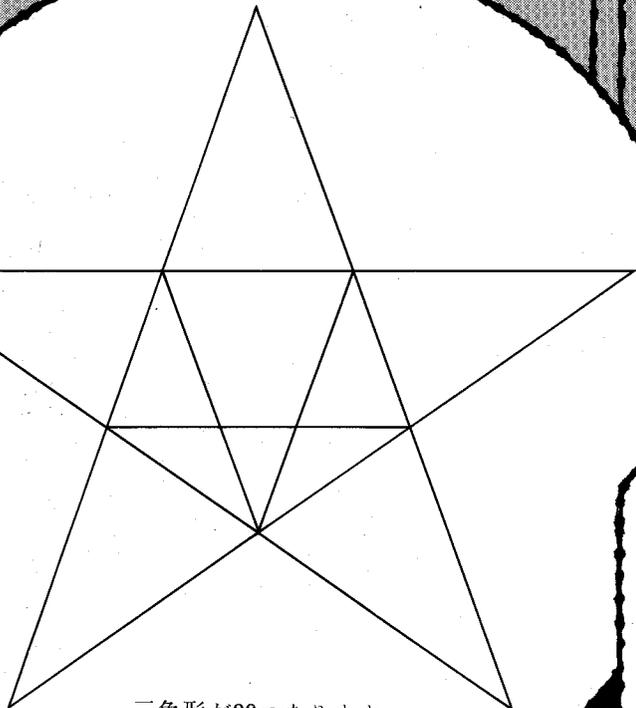
このふたは1~7までの数字を18コつけてかきました。全部たすと71になります。18コみつけて計算してみましょう。



あいつ、あれで電気そうじ器に  
ばけたつもりなんだよ。



下界はくもりでござるな。  
さようでござる。

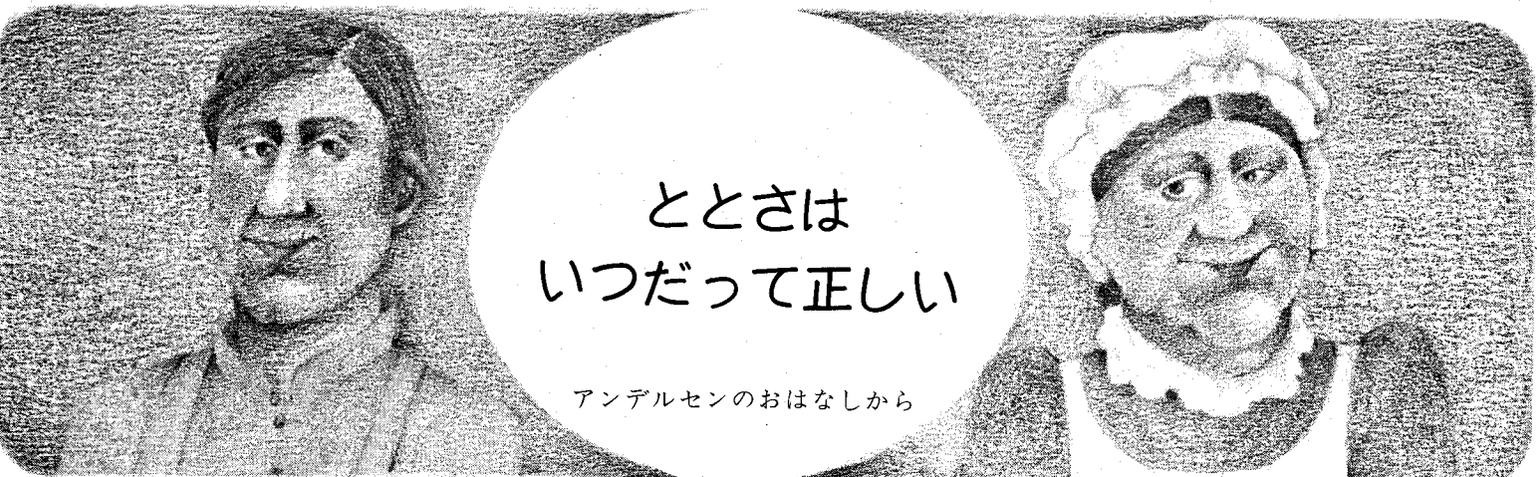


三角形が22コあります。  
さがせるかな。  
リチャード・ラタ



みて、まよったのはぼくら  
だけじゃないよ!





## ととさは いつだって正しい

アンデルセンのおはなしから

デンマークのいなかのおはなしです。むかしむかし、おひやくしょうさんがおかみさんといっしょにくらしていました。家にはコケがいっぱいはえていて、やねにはコウノトリのすがありました。かべはゆがんでいて、まどは小さくて、おまけにひとつしかあきませんでした。そうそう、パンをやくかまどがありましたっけ。にわのかきねはキイチゴで、池のまわりにはヤナギの木がうえてありました。池にはアヒルのおやこがおよいでいました。それからヨボヨボの犬が一びきいて、人がとおるとほえました。

おひやくしょうさんは、お金もちではありませんでしたが、馬を一つもっていました。でも、にわには馬がたべる草がなかったので、馬は道ばたの草をたべていました。おひやくしょうさんはときどき馬ののって町へ行きました。となりのおひやくしょうさんが、かりにくることもありました。村の人たちは、よいことをしていれば、よいむくいがあることをしんじていました。



でも、ある日、おひやくしょうさんは、馬をなにかもっとやくにたつものにとりかえれば、もっとよいことができるとおもいました。でも、なにとりかえたらよいのかわかりませんでした。

「すぐわかりますよ、おまえさん」とおかみさんがいいました。「きょう町で市がたつから、馬にのって町へいきなさい。そこでほかのものとりかえなさったらいかがです。ととさはいつもうまくやりなされるしんじてますよ。」

おかみさんはととさがうんとりっぱにみえるように、おおきなネクタイをむすんであげました。それから、ぼうしのほこりをはらって、キスをしてあげました。おひやくしょうさんは馬ののって、でかけました。

おひさまがてって、あつい日でした。道には日かげになるところはなく、ほこりっぽい道は市へいく人でいっぱいでした。にぐるまをひいている人もあり、馬ののっている人もいました。でも、たいていの人は歩いていました。しばらくいくと、みたこともないような、うつくしい牛をつれた人にであいました。

「あの牛はきつと、じょうとうのミルクをたくさんだすぞ」おひやくしょうさんはおもいました。そしてその男のひとに声をかけました。「もし、牛をつれたおかた、ちょっとはなしがあ

るんじゃが」男の人はふりむきました。「この馬は牛よりも、ねが高いとおもうんじゃが、わしにゃ牛のほうがありがたいんじゃ。ひとつとりかえてくださらんかのう。」

「ええでがすとも」男の人はいいました。

おひやくしょうさんは、ほしかったものを手にいれました。ここでその牛をつれて家へかえればよかったのですが……つい市へいきたくなくなりました。それが不幸のはじまりで……、いやしかし！？

おひやくしょうさんは牛をつれて歩いていきました。するとヤギをつれた人にであいました。「ヤギもいいわな。いいヤギだ。ふゆさむくになったら家にいれてやれるし。わしの家にゃ、牛にやるえさは、たんとはない。ヤギもいいさなあ」おひやくしょうさんはもう一どヤギを見ました。そしてヤギのほうがほしくなりました。

「おまえさん、あんたのヤギとわしの牛をとりかえませんかね」おひやくしょうさんはいいました。「ええでがすとも」とその人はいいました。



おひやくしょうさんは、歩きはじめると、まもなく石の上にすわって、やすんでいる人にあいました。その人は大きなガチョウをかかえていました。

「なんてまるまるしたガチョウだねえ。」おひやくしょうさんは目をまるくしていいました。「うちの池でおよがせたら、きつとうつくしかろうなあ。かかさはきつと、ジャガイモのカワをやるだろうさなあ。」おかみさんはよくガチョウがほしいといていたものでした。おひやくしょうさんはかんがえました。そして「うん！とりかえよう」とおもいました。そして「このヤギとあんたのガチョウをとりかえませんかね。そうしてくれるとありがたいんじゃが」とその人にいいました。

「そのヤギと、このガチョウをでがすか！」男の人はびっくりしていいました。「そりゃ、ねがってもないが、あんた、ほんとにいいのかね」

おひやくしょうさんは、とりかえてもらったガチョウをかかえて歩きはじめました。市のちかくへくると、人やどうぶつで、おすなおすなの大にぎわいでした。

町の入口には門ばんがいて、ジャガイモカゴの中にメンドリをいれていいました。メンドリがこわがったり、人ごみの中へにげていったりしないようにするためでした。そのメンドリのしっぽは、オンドリのしっぽのようにふさふさでした。

「コーコッコッコッコッコ。」メンドリはそうなきながら、おひやくしょうさんのほうを見ました。

「きれいなメンドリさなあ。あいつを手にいれたいものじゃが。」おひやくしょうさんはいいました。メンドリはいつだって、地めんをひっかいてえさをさがします。おひやくしょうさんはおもいました。「メンドリはタマゴをうんでくれる。とりかえてくれるかどうか、きいてみよう」

その人はすぐにとりかえてくれました。ガチョウをニワトリにとりかえると、おひやくしょうさんは、のどがかわいて、おなかもすいてきました。

やどやにはいっていくと、おひやく



しょうさんは、やどやの下男にどしんとぶつかりました。下男は大きなふくろをかついでいいました。「そのふくろの中みはなんですかね。」おひやくしょうさんはたずねました。

「くざったリンゴでさあ。ブタゴヤにもっていくところなんで。」下男はこたえました。

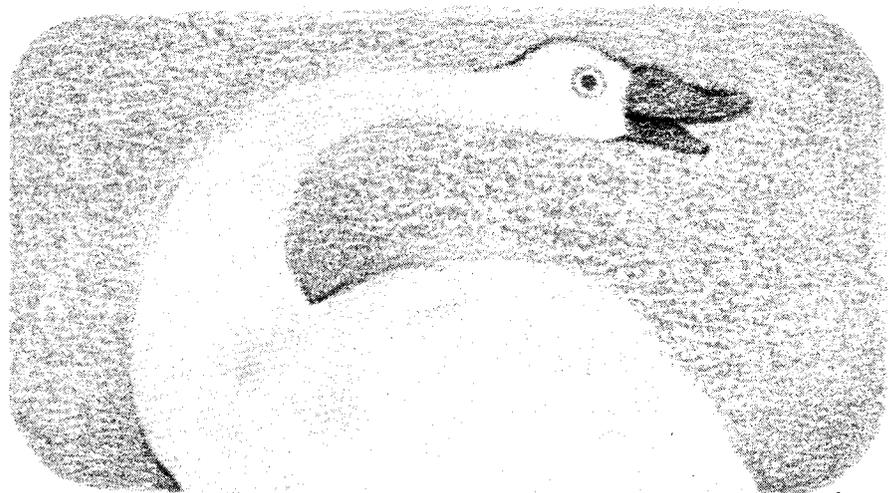
「ひとふくろ、ぜんぶ！なんてむだなことをするんじやろう。かかさにひと目見せてやりたいもんじや。」おひやくしょうさんはおもいました。きょう年おひやくしょうさんの家のふるいリンゴの木には、ひとつしかりんごがなかったのです。おかみさんはそれをだいじに、とだなの中にしまっていたが、もうカラカラにひからびて、

クルミぐらいの大きさしかありませんでした。おかみさんはおひやくしょうさんに、いったものでした。「この木に、たわわにリンゴがなったらねえ。」おひやくしょうさんは、おかみさんにふくろいっぱいリンゴを見せたら、どんなによろこぶだろうとおもいました。そして、下男にそのリンゴをくれないかとたのみました。

「かわりに、なにをくれやす？」下男はいいました。

「メンドリじゃが。」おひやくしょうさんはいいました。というかいわぬうちに、下男はおひやくしょうさんのうでに、どきりとリンゴのふくろをわたしました。

やどやは肉やや、おひやくしょうや



ばくろうでいっぱいでした。ふたりのイギリス人のお金もちもいました。おひやくしょうさんは、どかりとすにこしかけると、リンゴのふくろをストーブの上においてしまいました。ふくろはジュッと音をたてました。

「それは、なんだね」イギリス人のお金もちが、ストーブの上のふくろを指さしていいました。

おひやくしょうさんは、馬を牛に、牛をやぎに、やぎをガチョウに、ガチョウをメンドリに、メンドリをひとふくろのくさったリンゴにとりかえたしだいをものがりました。

「おまえさん、家にかえったら、おかみさんはカンカンだろうよ」イギリス人は、ばかにしていいました。

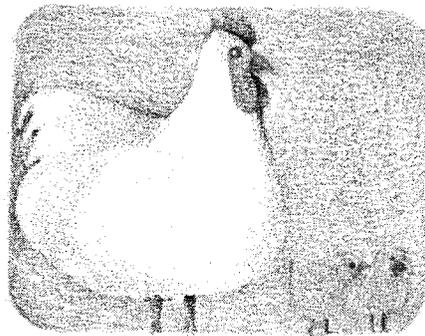
「いいや」おひやくしょうさんはいいました。「かかさはわしにキスしてこういいますだ。『とときはいつだって正しい』って」

「わたしは、おかみさんがそういわないほうに、たるいっばいの金かと、ふくろいっばいの銀かをかける」ふたりのイギリス人はいいました。

「たるいっばいの金かで、たくさんでさ。わしがまけたら、たるいっばいのリンゴをさしあげやすよ。それに、たるいっばいの金かにみあうように、わしとかかさを、おすきなように、つかってだせえ」おひやくしょうさんは、じしんまんまんでいいました。

ふたりのイギリス人は、やどやの主人に馬と馬車をかり、3人でおひやくしょうさんの家へきました。家へつくと、犬がほえたて、おかみさんがでむかえました。

「いまかえったよ、かかさ。」おひやく



くしょうさんはいいました。

「まあまあ、ごぶじで」おかみさんはいいました。

「まあききなさい。わたしは馬を牛にとりかえたんじゃ」

「やっぱり、とときだねえ。」かかさはおひやくしょうさんの首にうでをまわしていいました。「ミルクやバターやチーズがとれるねえ」

「まあ、ききなさいや。それからわしは牛をやぎにとりかえたんじゃ」

「まあ、おまえさん、かしこいねえ。やぎにやる青草ならたんとあるし。夕げにやぎのおちちはおいしいよ。毛をかって、くつ下やぼうしがあめるしね。おまえさんは、なんてかしこいんだろう」

「それからじゃ、わしはやぎをまるまるふとったガチョウにとりかえたんじゃ」

「まあまあ、おまえさん、クリスマスにはほんとうに、まるまるふとったガチョウがたべられるねえ。おまえさんは、いつもわしのことをおもってくださいってさあ」

「それから、わしはガチョウをメンドリにとりかえたんじゃ」おひやくしょうさんは、ほこらしげにいいました。そのときのことを、おもいだしながら。

「まあ、それはよかったこと」おかみさんはいいました。「メンドリはタマゴをうみますよ。タマゴからはかわいいヒヨコがうまれてさあ、すぐニワトリがいっばいになりますよ。わし、まえからそうならなあって、おもってましたよ」

「それからじゃ、わしはメンドリをふくろいっばいのくさったリンゴとと

りかえたんじゃ」

「まあ、ととき、わしはあんたが大すきですよ」おかみさんはいいました。

「おまえさんが市にっているあいだに、おいしい夕げをつくることにしたんですよ。オムレツをつくろうとおもったんだけど、ケチャップがなくてねえ。となりのおかみさんったら、あるのかしてくれないのなもの。あのおかみさんたら、くさったリンゴもかせせなくせにっていうんだよ。うちのわには、なんにもならないって。もう、くさったリンゴをたたきかえしてやりますよ。おまえさん、ほんとうにいいものを、もってきてくださったねえ」

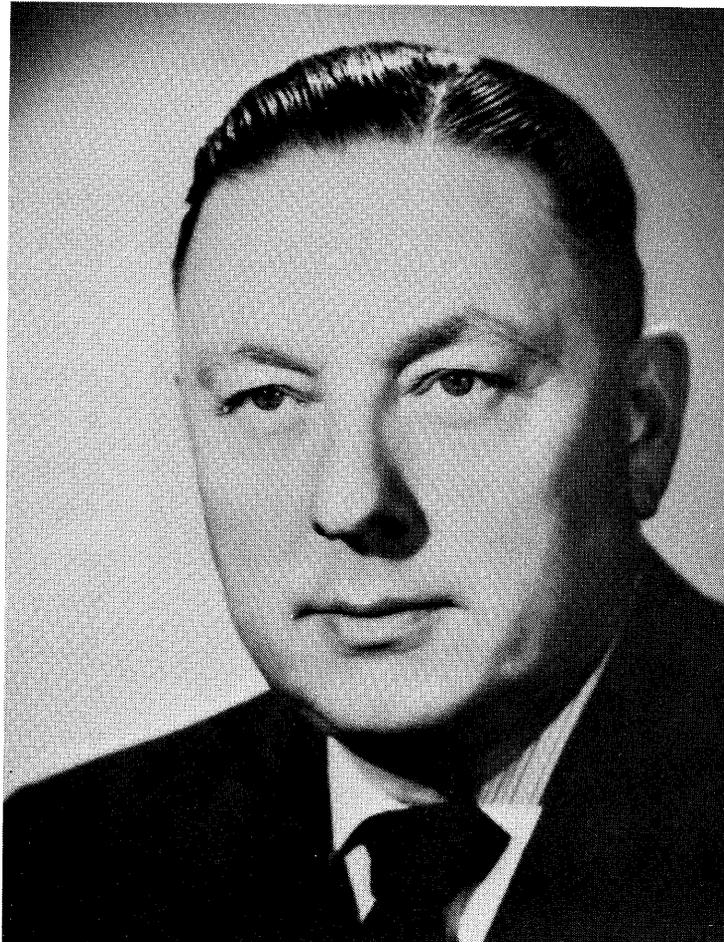
イギリス人はふたりのやりとりを見て、おなかをかかえて、わらいころげました。「だんだんわるくなるのに、このふたりはまるで気がつかないのだ。いつも、幸福、いつもまんぞくだ。こんな人にあっただけでも、金かをしはらうかちはあるよ」ふたりのイギリス人は、たるいっばいの金かをおひやくしょうさんにわたしました。

そうです。この金かは、おかみさんが、とときはかしこいとしんじていたから、もらえたのです。もうみなさんも、わかったでしょう。「とときはいつだって正しい」のです。



## 「逸話集、近代の使徒の生涯より」

レオン・R・ハートション編「逸話集、近代の使徒の生涯より」(Exceptional Stories From the Lives of Our Apostles) ソルトレークシティー、デゼレト出版社、1973年、許可を得て転載



## マシュー・カウリー

### 略歴

カウリー長老は1897年8月2日、アイダホ州プレストンで、マシアス・F・カウリー、アビー・ハイドの息子として誕生。弱冠17歳でニュージーランドへ伝道に召される。

ジョージ・ワシントン大学で法学の学位を修める。

1938年、ニュージーランド伝道部伝道部長に召される。

1922年7月13日、ワシントンD・Cで勉学中に帰省し、ソルトレーク神殿でエルバ・エレノア・テイラー嬢と結婚。当時十二使徒であったジョージ・アルバート・スミス大管長が司式。

1945年10月5日、半期総大会の聖会の席上、十二使徒評議員に支持される。当

大会でジョージ・アルバート・スミスが大管長に支持され、使徒指名の一番手として、幼少から愛し、導いてきた青年マシューが選ばれる。

1945年10月11日、スミス大管長により、当神権時代65人目の使徒に聖任される。ほぼ1年後、教会幹部に新しい役職が設置され、太平洋諸島伝道部の管理者に任命される。この新たな召しを受け、太平洋地域の数ある伝道部内の教会事業を指導する責任を与えられる。活動の本部は依然としてソルトレークシティーにあったが、着任後3年は海洋諸島を休む暇なく旅してまわった。宣教師時代、伝道部長時代にマオリ人が得たと同様の祝福を、今やポリネシア人が享受することとなったのである。

彼の言語の賜には目を見張るものがあった。全旅行を通じて土地の言葉を語り、人々から理解された。旅行は太平洋諸島に限らず東洋やオーストラリアの伝道部に及び、フィリピン諸島や日本や中国を訪れ、中国は再度福音伝道の地として奉獻された。この召しを受けておよそ3年後に彼は解任され、以後死に至るまで、他の教会幹部と共にステーキ部や伝道部を広く旅した。

1953年12月13日の死亡当時には、最も人々に愛される人物のひとりとなり、あのように愛され、尊敬された人物はごくまれであるといえよう。彼は、彼を知るすべての人の人生に足跡を残したのである。



## 17歳で

ほんの少年だったときのことをいかによく覚えていることか。私は3ヵ月間、土地の言葉を理解しないうまま、同僚なしでひとりきりだった。毎朝6時に森へ行き、11時間勉強と断食と祈りをしたときのことである。私はついに、3ヵ月になるかならないかの間に全く独学で、励ましてくれる宣教師もおらずに、土地の人の前に立ってその言葉で福音を説くという図々しきをしたのである。私はそれまで読んだことも聞いたこともない言葉を使ったが、胸には、前にも後にもあのときき感じたことのないものが燃えていた。私は自分のことを子供だとは思っていなかった。神の力が、17歳の青年である私を通して語ったのである。

## 私の家族はひざまずいて

兄弟姉妹、あなたがたにお話したい。この1、2ヵ月間私が何度も熱心に祈って、知らず知らず、通りでも祈ろうとしてひざまずく自分に気がつくことを。モルモンの家庭の本来の姿は、家族が輪になっての祈りの上に築かれるものである。この教会の至聖所は、このタバナクルでも神殿でもない、あなたがたの家庭にある。そこは、イエス・キリストの福音の救いの力を、あなたがたが試みる場所である。私は学校や太平洋諸島への伝道で家を離れたときに、どれほど父に感謝したことか。

私は8ヵ月の間ずっと病気だった。ねぶとや日射病にかかり、さなだ虫がわき、下腹を馬に蹴られ、と次々に災難を受けた。そんなとき、朝起きると私はひとりごとを言ったものである。「そうなんだ。家では父も母も兄弟、姉妹もみんなでひざまずいて、ぼくのために祈りを捧げているんだ」と。夕やみが来て夜のとぼりが下りると、1万2千キロも遠くで家族がひざまずいて祈っていることや、祈りの中に自分の名前が出てくることを知ったのである。私にとってそれは大事なことだった。私は自分の家庭、つまり父の家庭の理想の姿がそのままずっと崩壊せずにいたことを神に感謝している。結婚してからも、私が父の家に行くと、父は帰る前に、「ちょっとおいで。わたしはまだこの家族の祝福師だから、君に祝福を与える権利があるんだ」と言って、祈ってくれたものである。父は心の思いを神に述べたが、いつでも祈りの中で私に福音を説いていた。

## この民は神に近い 生活をしています

彼（マシュー・カウリー）は、来たるべき使徒職の召しのために、幾分か備えをされていたに違いない。……原住民の友人たちは、その召しを予見してはいなかっただろうか。彼自身も記憶しているに違いないある出来事が、ニュージーランドの伝道部の聖徒たち

が集まった場所でおきた。それはルーファス・K・ハーディーの追悼式典であった。ひとりの土地の人が、教会の管理評議員会からのハーディー長老の欠落を伝道部の損失と嘆いたが、彼は突然話をやめ、カウリー伝道部長を見てこう言った。「ちょっと待って下さい。憂えるには及びません。カウリー伝道部長は、帰郷されたら十二使徒評議員会の初めの空席を埋めるでしょう。私たちの代表がまた教会幹部になります。」

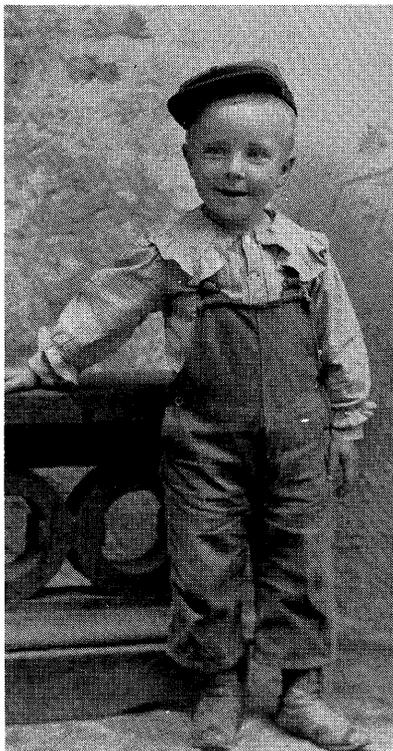
トウムアキ・カウリーは、その言葉が決して単なる思いつきではないことを知っていた。以前にも主の靈感がこの民に下るのを、幾度となく見てきたからである。「この民は神に近い生活をしています。何かの力を持っています。きっと彼らが奇跡を当然のことと信じているからでしょう。彼らは何でも、疑うということをしなないのです。」彼はこの民についてそう語った。

## 同じ方向を見つめて

最近私は、受け持ちのステーキ部のある男性の病床を訪れた。自分で動かせるのは目と舌だけという人だった。彼は見たり話したりはできたが、それがすべてで、腕も足も動かなかった。家の中はしみひとつなく、寝具も真白で、彼の体もきれいだった。手に力はないだろうに、彼の妻はその手を精根

込めて握っていた。手を握りしめる。……兄弟姉妹、そこに意味があるのだ。もしあなたがたがお互いに離れていて、手と手を握り合うよりも強い霊的なつながりを感じられなかったなら、できるだけ早くお互いの胸に飛び込んで行くがいい。真の愛とは昔ながらのロマンスシートにすわってみつめあうこと、お互いの目をみつめあうことではないのだ。それは真の愛ではない。真の愛とは、心にやってきてあなたの生命を突き動かし、祭壇から立ち上がって、ふたりが永遠を通して同じ方向をみつめるものなのだ。それが真の愛だ。ふたりが同じ方向をみつめること。

マオリ人は妻を称して「タク ホア ワヒネ」と言う。「私の連れ合いの妻」と



いう意味である。妻は自分の夫を「タク ホア タネ」と言う。「私の連れ合いの夫」という意味である。私は、ただ「私の妻」、「私の夫」と言うより、その方が好きである。「私の連れ合いの妻」、「私の連れ合いの夫」！ 連れ合いとは、永遠を通じて目ざす方向がひとつであることを意味している。

## 何とすばらしいことだろうか

神はすばらしい伴侶ではなからうか。神はすばらしい御方である。実に私は、人生に神のような連れを持ちたいものである。神のような人と仕事をしたいものである。その連れは私の所へ来てこう言う。「さあ、仕事の資金は全部出してあげよう。役立つものはみなあげよう。だから仕事に励みなさい。私を忘れないように。収入があったら9割を手元に残して、あとの1割を私に渡すこと。9割は好きなように使ってよろしい。私は1割をすぐに仕事に還元しよう。」これは何とすばらしいことだろうか。これこそ、私たちが教会に持っている連れである。私たちは9割を取って好きなように使い、時には破滅の道へも行く。そしてあとの1割を連れに渡し、それで神殿が立ち、礼拝堂が立つ。彼はそれを皆、すぐに仕事に還元する。彼の仕事に。兄弟姉妹、あなたがたが福音の原則に従えば、それだけ神はこの教会に融資されるのである。



## 私の改宗

ファビオ・クラビホ

これは、ファビオ・クラビホというひとりの兄弟がいかんにして末日聖徒イエス・キリスト教会に改宗したかを自らの手でつづった実話である。ファビオは南米コロンビアの人で、この国初

の改宗者のひとりである。彼は最近2年間のコロンビア伝道を終え、現在はBYUに通っている。

国民の大半が国教であるカトリック

教会のために働くことを第一希望にあげているという国で、私は宗教的な環境の中に生まれ育った。私はまだ若かったため、カトリックの司祭になるのが希望で、家族からその許しをもらおうと

が集まった場所でおきた。それはルーファス・K・ハーディーの追悼式典であった。ひとりの土地の人が、教会の管理評議員会からのハーディー長老の欠落を伝道部の損失と嘆いたが、彼は突然話をやめ、カウリー伝道部長を見てこう言った。「ちょっと待って下さい。憂えるには及びません。カウリー伝道部長は、帰郷されたら十二使徒評議員会の初めの空席を埋めるでしょう。私たちの代表がまた教会幹部になります。」

トウムアキ・カウリーは、その言葉が決して単なる思いつきではないことを知っていた。以前にも主の靈感がこの民に下るのを、幾度となく見てきたからである。「この民は神に近い生活をしています。何かの力を持っています。きっと彼らが奇跡を当然のことと信じているからでしょう。彼らは何でも、疑うということをしなないのです。」彼はこの民についてそう語った。

## 同じ方向を見つめて

最近私は、受け持ちのステーキ部のある男性の病床を訪れた。自分で動かせるのは目と舌だけという人だった。彼は見たり話したりはできたが、それがすべてで、腕も足も動かなかった。家の中はしみひとつなく、寝具も真白で、彼の体もきれいだった。手に力はないだろうに、彼の妻はその手を精根

込めて握っていた。手を握りしめる。……兄弟姉妹、そこに意味があるのだ。もしあなたがたがお互いに離れていて、手と手を握り合うよりも強い霊的なつながりを感じられなかったなら、できるだけ早くお互いの胸に飛び込んで行くがいい。真の愛とは昔ながらのロマンスシートにすわってみつめあうこと、お互いの目を見つめあうことではないのだ。それは真の愛ではない。真の愛とは、心にやってきてあなたの生命を突き動かし、祭壇から立ち上がって、ふたりが永遠を通して同じ方向を見つめるものなのだ。それが真の愛だ。ふたりが同じ方向を見つめること。

マオリ人は妻を称して「タク ホア ワヒネ」と言う。「私の連れ合いの妻」と



いう意味である。妻は自分の夫を「タク ホア タネ」と言う。「私の連れ合いの夫」という意味である。私は、ただ「私の妻」、「私の夫」と言うより、その方が好きである。「私の連れ合いの妻」、「私の連れ合いの夫」！ 連れ合いとは、永遠を通じて目ざす方向がひとつであることを意味している。

## 何とすばらしいことだろうか

神はすばらしい伴侶ではなからうか。神はすばらしい御方である。実に私は、人生に神のような連れを持ちたいものである。神のような人と仕事をしたいものである。その連れは私の所へ来てこう言う。「さあ、仕事の資金は全部出してあげよう。役立つものはみなあげよう。だから仕事に励みなさい。私を忘れないように。収入があったら9割を手元に残して、あとの1割を私に渡すこと。9割は好きなように使ってよろしい。私は1割をすぐに仕事に還元しよう。」これは何とすばらしいことだろうか。これこそ、私たちが教会に持っている連れである。私たちは9割を取って好きなように使い、時には破滅の道へも行く。そしてあとの1割を連れに渡し、それで神殿が立ち、礼拝堂が立つ。彼はそれを皆、すぐに仕事に還元する。彼の仕事に。兄弟姉妹、あなたがたが福音の原則に従えば、それだけ神はこの教会に融資されるのである。

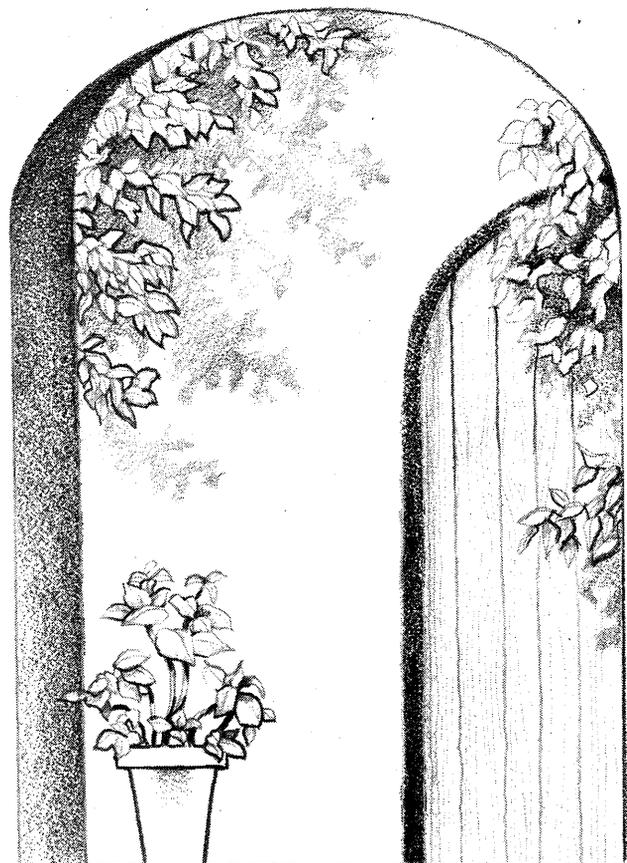
いろいろな手立てを試みた。私は5人家族の3男で、たいていの家庭では長男を教会への奉仕に捧げるのが常だった。私の家では長兄が、7年間神学校で働いたが、結婚と共に学校を離れてしまった。家族はそれにながっかりして、神学校へ入りたいという私の説得もなかなか大変だったが、ついに彼らを納得させた。私は父に兄のような失望はさせないと約束して、1963年に立派な司祭になる夢を抱いて神学校に入学した。

ある日、ドイツに送る手紙を出しに郵便局へ行くと、ひとつのカウンターにきれいなカードが置いてあるのを見つけた。神殿の絵がかいてあったので、興味を引かれたのだ。カードの字は読まなかったが、それを取ってポケットに入れると、私は局から歩いて帰った。それから2、3日して、背広をクリーニングに出そうと空かどうかポケットを探ってみると、ひとつのポケットにあのカードが入っていた。きれいなカードだったので取っておこうと思い、書いてあることを読んでみた。ひととおり読んだ私は思わずつぶやいた。「こんなことを信じるなんて、気でも違っているんだ」と。

カードの説明はLDSロサンゼルス神殿で、南米と合衆国のふたつの住所が書かれていた。LDSというのはモルモンのことだということで、私は「もうこんなものはごめんだ。5人や10人の妻を持つ一夫多妻主義者じゃないか」とつぶやいたものである。

その翌日、私はモルモン経に関する信仰簡条というのに興味を引かれたため、アンデス伝道部に手紙を出す気になった。その本がどういうものか知りたかったのだ。手紙を出すと学校に戻って、そのことはすぐにすっかり忘れてしまった。

ある日、姉がベルーからの手紙と小



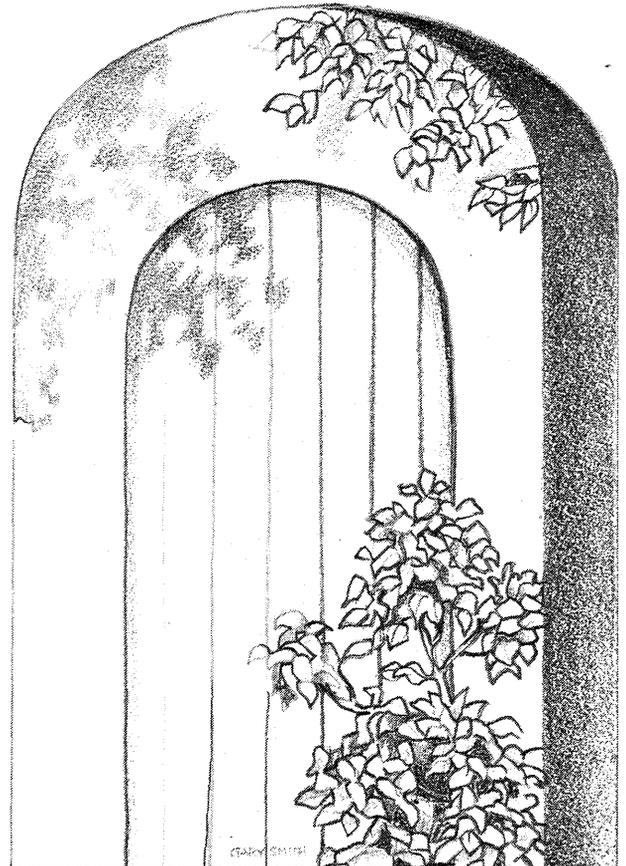
包を届けに私の所へ来た。中をあけると、モルモン経だった。手紙には、現在コロンビアには宣教師がいないが、もしもっと知りたければ、コロンビアに伝道が開始されたらすぐに宣教師を送ると書いてあった。そしてモルモン経をぜひ読んでみるようにと書かれていた。姉が手紙のことを聞いたので、友だちからだて答え、姉が帰るまで小包の方は開かなかった。

どうしてかはわからないが、私はその本を読み始めた。勉強の時間にも、聖書のカバーをかけて読みふけた。4日間でモーサヤ書まで読んでしまった。

7月に姉がまた訪れてきて、アメリカ人がやってきて私はいないかと聞いたとのことだ。アメリカ人に知り合いないし、本の内容は忘れていたので、私はびっくりしてしまった。しかし私は姉に、もしまた彼らが来たら私の電

話番号を教えるように頼んだ。それから2、3日して電話があった。午後の2時だった。彼らはモルモンの宣教師で、私に話をしたいという。私は、自分は神学校にいるので訪問の約束はむずかしいと言った。しかし彼らはなおもゆずらず、翌日会うということになった。私は、来るときには宣教師ではなくただの友人だと言うように注意をした。そのようにして、彼らと私は話ができるようになった。私にとって最初の話は印象深かったのだが、彼らには「教会は変えるつもりはありません。これが真理だと知っていますし、私は司祭になりたいのです」と言った。宣教師たちは、モルモン経を読んで、祈るようにと勧めた。私は確かに祈ることを恐れていた。そのときは自分の教会が真実だと信じていて、本心司祭になりたかったのだ。

どうしてかはわからないが、モルモ



ン経は読み続けた。宣教師がその3、4日後にまた来るまで、モルモン経に読みふけっていた。彼らは2回目のレッスンをし、私は非常に心を打たれた。

ある午後のこと、私は神学校を抜け出してLDSの集会に出かけた。出席者は少なかったが、良い話だった。

宣教師の訪問は続き、5回目のレッスンになった。宣教師にバプテスマを受けたいかと聞かれて、「知りたいのはモルモンについてだけなんです」と返事をした。彼らは少々がっかりしたと思うが、またも、祈ってモルモン経を読み続けるようにと勧められた。それきり約束は作らなかった。もっと知りたくなったらこっちから電話をするからと言い、自分は司祭になりたいのだと念を押したからだ。

翌朝目がさめると、私は自分が証を持っていることを悟った。それですぐに宣教師に電話をして、会う約束をした。6回目の会合のときに、私は自分

がまだ若く、家族には司祭になるのを期待されているので、父から許可のサインをもらうのはむずかしいと、彼らに話した。宣教師に父の会社の住所を教えると、彼らは父を訪問したが、そのとき父は、私にバプテスマを施したいという話を聞いて冗談を言っているのだと思った。しかしそれが本気だとわかると、父は激怒した。そして、モルモンになるかならないかは知ったことではないが、もしモルモンになったら、次の日から自分で住む家を捜せと言った。

1967年9月6日、私は冷たいプールの水でバプテスマを受けた。

父は私を許してくれたが、私がLDSの教会に出席するには反対した。

私はバプテスマの2週間後に支部書記に召された。15歳の少年としては、大きなチャレンジだった。そしてそれから2年余り、書記として働いた。自分で自分の会員記録も作成した。私は

コロンビアでのLDSの改宗者としては初めてのことに数えられた。

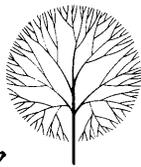
その1年後、私の父母が亡くなり、私は何度もおなかをすかせて、日用品を買うお金さえなくなるありさまで、高校生活を続けるのが大変になった。家は裕福だったが、私がモルモンだということで私には何もくれないのだ。

私は高校を卒業してすぐ合衆国にわたり、アイダホ州のレックスバークのリックスカレッジに授業料全額貸与奨学生として学んだ。

故国に伝道にも召されて、再びコロンビアへ宣教師として帰ったときには、教会員数は5千人になっていた。そこで2年間働くうちに、同胞を愛することを知って、大勢のすばらしい友人を得た。伝道は1973年8月に終わった。

現在私はBYUに通っている。私には証がある。この教会が真実で、ジョセフ・スミスが神の真の予言者であることを、私は心から確信している。

# 待ち 望んでいる 先祖のために



## 系図探求者が探求の過程で 得る祝福と靈感の報い

ホイト・パーマー

人がこの世で経験するいかなるものにもまして、系図には大きな霊的報いが伴う。そしてその報いは自分のために施される救いの儀式を幕のかなたで待っている先祖からの助けを感じつつ、信仰と祈りと断食をもって行なうときに得られるのである。

彼らは、この世で死すべき体を持って歩んでいたときと同じように、今も幕のかなたの世界に実在し、生きている。そして、自分がいつどこで生まれ、生活し、そして死んだか、また両親は誰か、家族には誰がいたかをすべて知っている。

末日聖徒の系図探求に関する記録をひもとくと、これら霊界にいる人々が自分たちを助けようと努めている現代の子孫に導きを与えた例がたくさん見られる。

ゲートルード・トッド夫人は長年系

図を探求してきた人であるが、夫の祖父にあたるアブラハム・トッドの家族の調査にあたってはなかなか成果が得られなかった。わかっていることは、彼が1850年に英国ノーフォークのフォーンセッドで生まれたことと、その両親の名前だけであった。

トッド姉妹は、わずかな手がかりでも得られそうなら、どこにでも、また誰にでも手紙を書いた。そしてそれはおびただしい数に及んだ。また、系図図書館で得られる記録の調査にもかなりの時間を費やした。彼女はこの先祖は決して無視してはならないという衝動に駆られてその仕事を続けた。

そうしたある朝、彼女はテーブルの上に手紙と記録をすべて集めた。それからこれまで何度となく行なってきたように、またいつものように断食をして、ひざまずいて主に助けを請い願った。彼女は祈り終わって立ち上がると、ファイルの一番上の紙に古代英語で黒く印刷されたメソジストという言葉に目が留まり、驚きとも喜びとも言えない気持を感じた。

そこで彼女は早速、英国フォーンセットのメソジスト教会の責任者にもう1通手紙を書いた。

間もなく返事がきた。また同じ日にそれとは別にもう1通手紙が届いた。それは年老いて退職した牧師からのも

ので、彼女の手紙のことがメソジスト教会の責任者から彼に通知されたのであった。その老人こそ、だれだろう、アブラハム・トッドの甥であり、彼女の母親はアブラハムの姉だったのである。

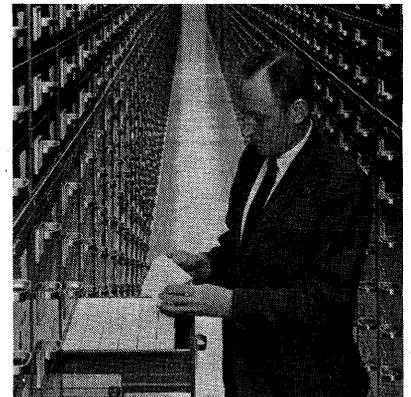
トッド姉妹がその手紙から数多くの必要な先祖の情報を集めることができ、どれほど喜びと感謝を覚えたか、想像していただきたい。けれども、彼女の喜びと満足は途絶えた。何かが間違っている。家族がひとり抜けているという気がしてならないのである。そこで、それについて今一度何かをしなくてはならないという衝動に駆られた。

幾つかの手がかりをたどり、不明となっている家族が見いだされるまで、さらに研究と調査を続けた。それは幼ない内に亡くなったスーザンという名の女の子で、甥の牧師さえ知らなかった。スーザンの名は家族や国、教会のいずれの記録にもなかった。しかし、トッド家族が短期間に住んでいた別の町を調べ出し、その町から取り寄せた、国勢調査申告書の中にあつたのである。

こうしてその家族は共に結び固められ、トッド姉妹は満たされた気持を得たのである。不思議なことに、「メソジスト」という言葉はやがて色あせて紙面から消えてしまった。しかしその前に、フォーンセットで見つかった家族の記録の中のある「メソジスト」と

左：系図図書館でマイクロフィルムを見る人々。

右：グラナイトマウンテン記録保管庫には30メートルのマイクロフィルムが80万本保管されている。



いう文字と比較し、完全に符合することが確認されたのであった。

もうひとつの話は、ライダ・プリンスに関するものである。彼女は臨終の床にある叔父に、リー家の系図探求者である彼の義務を引き受けようと約束をした。その代わりに、幕のかなたの先祖を見つけ、彼らの助けを求めようと叔父に頼んだ。

彼女はまた、当時十二使徒評議員会会員であった、いとこのハロルド・B・リー長老から受けた祝福の中でも、必要なときに幕のかなたから助けを受けるであろうと約束されていた。

ライダは長い間勤勉に努力を重ね、曾祖母のジェーン・ペイル・ジョンソンの系統をたどろうとしたがうまくいかなかった。そこで彼女は、約束されている助けを求めて祈り、断食をした。すると、彼女の祈りは不思議な方法で答えられた。その夜、黒っぽい服を着たひとりの若い男が訪れ、ベッドのすその所に立った。そのとき彼女はまだ眠っておらず、部屋にはまだ電気がついていて、彼女は見聞きしたすべてのことを書き留めた。

その若い男は彼女に「マーロン・ジョンソンの家族——その先祖と子孫」という書名の本をみせた。表紙の内側には、「ニュージャージー州リトルタウン、1775-1857」と印刷されていた。この御使いは自分が誰であるか告げなかったが、「この本には祖母の記録が出ています」と彼女に告げた。

系図協会にこの本はなかったが、国会図書館で見つけることができた。早速入手方法を調べてプリンス姉妹の息子がそれを1冊手に入れたところ、その参考書一覧の中に他のものとは別に一段と目立って、「フィッツ・ランドルフの伝統」という書名が出ていた。そこでプリンス姉妹はこの本も手に入れた。こうして彼女はこの2冊の書物から、ジョンソン家の先祖とその親族

の家族の記録を500枚以上作成し、直系先祖を26代さかのぼることができたのである。

ヘンリー・クリスチャンセンは、系図協会の実務副部長であり、また公認の系図探求家である。彼はある依頼人の要請を受けて図書館の書架を調べていた。その依頼人の先祖は、「ニューヨーク在住のオランダ人」の中に入らずだった。しかしこれらの移住者に関する資料をしらみつぶしに調べてみたが、何の手がかりも得られなかった。

人が次に打つべき手がなくて困っているときに時折何かが起こるように、彼も、書名に次々目を通していき、ペンシルベニア州のオランダ人移住者に関する本の書名に目がとまった。この本は細かい文字で500頁以上にも及ぶ、部厚い本であった。しかし索引はなく、おまけに何か特定の項目を見つけないときに役立つような配慮は全くなされていなかった。そこで彼はその本を書架に戻し、先に進んだ。

ところが、また同じ書架の前を通りかかったとき、その同じ本に目が留まり、もう一度見てみたいという気持ちかられた。そこで彼女は立ち止まって、無意識に手を伸ばした。そして取り出そうとした瞬間、本が手からすべり落ちそうになった。彼は本能的に、本が床に落ちないように、そばの小さなテーブルの上にはね上げた。すると本はテーブルに乗ったはずみに開き、開いた頁の上に彼の手が乗った。するとどうだろう。彼の人差し指の先にあたるちょうどその所に、彼の探していた人の名前があったのである。

モーリーン・ワールキスト姉妹とその夫マークは、モーリーンの先祖が住んでいたミシシッピのチカソー郡に数度旅をした。その旅に際してふたりはいつも祈り、断食をし、少なからず報いを得てきた。しかしその中でも、1969年の系図探求で得たものは、他に

も増してすばらしい期待の持てるものだった。

ワールキスト姉妹の母方の曾祖父について調べるのがこの旅の目的だった。旅にはメンフィスからワールキスト姉妹の父が同行した。

彼らはヒューストンの郡裁判所で遺言書を調べる許可をもらった。けれども、彼らの探していた姓に関連する見出しは、遺言書の索引には見当たらなかった。最後に残された方法は、手当たり次第にめくって見ることだった。しかしこれにはほとんど希望が持てない。彼女の父はあてもなくファイルの引出しを次々引き出して中を調べた。それから特別にしつらえられたかぎ状の棒で、床から2.7メートルほどの高さの列にある引出しをひとつ引っ張った。

それが引き出されたとき、数枚のばら紙が床に落ちた。ところが驚いたことに、そのうちの1枚は、彼らが探していた曾祖父の名前の載っている土地譲渡証書であった。しかしそれ以上の価値ある事項は何もその書類に見られず、彼らの揚々たる気持も消沈してしまった。

ワールキスト兄弟は、仕方なくその引出しを元に戻そうとした。ところが何かつかえているらしく引出しがきちんとしまらない。そこで彼ははしごをのぼって手を差し込み、引出しの後ろにつまっていた書類を取り出した。何とそれはワールキスト姉妹の曾祖父の遺言書であった。そしてそこには、妻の名と9人の子供たちの名、またそれに付随する数々の情報が記されていた。この結果、もう一代さかのぼって知ることができたのであった。

ホイット・パーマーは元公認系図探求家で、現在、ソルトレーク・バトラーウエストステーク部バトラー第10ワード部の大祭司グループリーダー補助の任にある。

# エリヤの力

私たちが従順であれば、主は約束を違えず  
私たちを見守って下さる

十二使徒評議員会補助  
セオドア・M・バートン

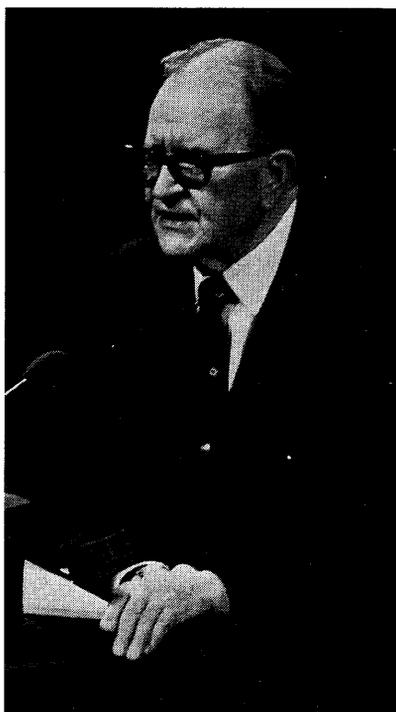
兄弟姉妹、今日この場で行なわれた事柄に対し、私は全面的に賛同の意を表わしたい。神より予言者として任命されたこれらの方々を、私は全面的に支持し、忠誠心を抱いている。

旧約聖書には多くの偉大な予言者のことが語られている。その中で、完全な神の権能を所有していた古代イスラエルの最後の予言者は、テシベ人エリヤ（エライジャ）である。エリヤが神の命を受けて、雨が降らないように天を閉じ、それを結び固めたところ、地に飢饉が起こった。この飢饉の間、彼は、ヨルダン川に注ぐケリテ川のほとりで、奇跡的にからすに養われた。

その後神はエリヤをザレパテの町に遣わし、その町で彼を養うことになっているひとりのやもめがいることを告げられた。エリヤはその町のはずれでこのやもめに会い、彼女に食べ物を求めた。

「彼女は言った、『あなたの神、主は生きておられます。わたしにはパンはありません。ただ、かめに一握りの粉と、びんに少しの油があるだけです。今わたしはたきぎ二、三本を拾い、うちへ帰って、わたしと子供のためにそれを調理し、それを食べて死のうとしているのです。』」（列王上17：12）

そこでエリヤは、もし自分を養ってくれるなら決して食物に事欠かないであろうと、主のみ名によって彼女に約束した。粗末な身なりの神の人の約束に、それが確かかどうかわからぬままに自分の命と息子の命をかけた、その婦人の信仰には考えさせられるものがある。彼女は求めに応じてパンを焼き、エリヤに食べさせた。すると予言者の約束通りに奇跡が起こった。「主がエリヤによって言われた言葉のように、



かめの粉は尽きず、びんの油は絶えなかった。』（列王上17：16）

エリヤの力がこの世の事柄においてこれほど著しいものであるなら、彼の持っていた霊に関わる力はどれほどであろうか。エリヤが地上でつなぐすなわち結ぶことは天でもつなぐれ、地上で解くことは天でも解かれることを、あなたは覚えておられることだろう。当時、民が邪悪であったため、彼は雨が降らないように天を閉じた。そして、エリヤがバアルの450人の祭司の無力ぶりを民の前に示すまで、一滴の雨も降らなかった。祭司たちが滅ぼされ、民がへり下ったとき、エリヤは神の力によって再び天を開いた。こうして雨は降り、飢饉は終わった。この結び固めの力は、完全な神の権能を所有している神の予言者たちに特有のものである。

イエスはこの結び固めの力をペテロに約束して言った。「わたしは、あなたに天国のかぎを授けよう。そして、あなたが地上でつなぐことは、天でもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう。』（マタイ16：19）

しかしその1週間後、イエスがペテロとヤコブ、ヨハネを伴って高い山の頂に登られたときまで、この結び固めの力はペテロのものとならなかった。彼らはここで身を変えられた。そしてモーセとエリヤ（エライヤス）が彼らに現われ、イエス・キリストの指示の下に、完全な神権の権能がこれらの使徒たちに与えられた。このエライヤスはエライジャのギリシャ名であることを忘れてはならない。あの結び固めの権能の鍵を所有していた旧約時代の最後の予言者エリヤは、こうして新約時代の予言者たちにこの力を渡したのである。神権にははっきりした秩序があり、権能の鍵の受け渡しは、主の指示の下に、主の定められた方法で注意深く行なわれる。そして一度この権能が回復されると、聖典にあるように、これをすべての使徒に渡すことが可能であった。イエスは十二使徒にこう言っておられる。「よく言うておく。あなたが地上でつなぐことは、天でも皆つなぐれ、あなたがたが地上で解くことは、天でもみな解かれるであろう。』（マタイ18：18）

福音を学んでいる人々の中に、エリヤの力とエライヤスの力についてかなりの混乱が見られる。エライヤスという名の予言者がいるからである。しかしこのエライヤスは、ノアという名でもっとよく知られている。このエライヤスの務めは先駆者すなわち道を備える者としての務めである。この力を持

つ者たちは先駆者であり、さらにその後  
に続く偉大な事柄のために準備をする者  
である。このような予言者たちはエリヤ  
(エライヤス)の称号をもって呼ばれる。

モーセとエリヤ(エライジャ)が訪  
れたことを聞いた十二使徒は、エリヤ  
(エライヤス)が先に来るはずである  
ことを知っているといエスに告げ、説  
明を求めた。そこでエスは彼らに、  
エリヤ(エライヤス)は先に来なけれ  
ばならず、この教えが正しいことは聖  
典の通りであると彼らに告げた。それ  
からエスは、バプテスマのヨハネが  
ご自分の前に道を備えるはずのエリヤ  
(エライヤス)であり、人々は彼をエ  
リヤ(エライヤス)と認めなかったこ  
とを明らかにされた。また、この先駆  
者の後、イスラエルの家にメルケゼデ  
ク神権を結び固める力を持つエリヤ  
(エライジャ)が来る。次いで、よろず  
のものの中で最も大きな力を持つ救い主  
贖い主である、メシヤすなわち油注が  
れた御方の統治が始まる。

この時代においてもそうであった。  
神権の回復に伴う先ぶれは、アロン神  
権の力を回復するためにエリヤ(エラ  
イヤス)として現われたバプテスマの  
ヨハネの訪れである。次いでペテロと  
ヤコブ、ヨハネが訪れ、大神権すな  
わちメルケゼデク神権を回復した。し  
かしこの時代は、末の日に確立されると  
ペテロの語った、時満ちる時代である。  
従ってこの時代には、「神が聖なる預  
言者たちの口をとおして、昔から預  
言しておられた万物更新」(使徒3:21)  
がなければならない。

そのために、イエスがすべての権威  
と栄光を持って来られる前に、エリヤ  
(エライジャ)の結び固めの力の回復  
を含み、すべてのものがあらかじめ備  
えられなければならない。

そうすれば、マラキの告げた予言は  
成就するのである。この神権時代の初  
め、モロナイがジョセフ・スミスを教  
えるために遣わされたとき語ったま  
まに、この約束を引用しよう。

「見よ、主の大いなるおそるべき日の来る  
前に、予言者エライジャ(エリヤ：訳者注)  
の手によりて、われ神権を汝に顕さん。

彼は先祖になされし約束を子らの心に  
植え、子らの心にその先祖を思わせしめん。

もし然らば、主の来る時、全地はこと  
ごとく荒れ廃れん。」(教義と聖約2章)

この聖句は非常に重要であるので、  
四大標準聖典すべてにおいて、ほとん  
ど逐語的に引用されている唯一のもの  
であると思う。この結び固めの権能の  
鍵は、変貌の山で行なわれたと同様に、  
完全な秩序と調和の内に回復された。

また、特別な神権の鍵を持っていた予  
言者たちも現われ、地上の予言者にそ  
れらの鍵を回復した。モーセが現われ、  
エリヤ(エライヤス)が訪れ、次いでエ  
リヤ(エライジャ)が現われて言った。

「見よ、ここに於て正にその時は全  
く至れるなり。そは嘗てマラキの口に  
よりて言われしことにして、すなわち  
主の大いなるおそるべき日の来らん前  
に、彼(エライジャ)遣わさるべし。

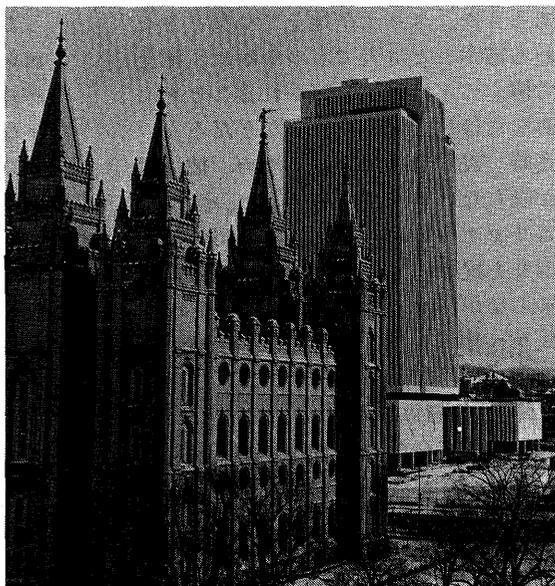
すなわちエライジャは来りて先祖の心に  
子らを思わせ、子らの心に先祖を思わせ  
ん。然らば、全地は<sup>の</sup>咄いをもて打たるべ

し、と言われしことを証する時なり。

この故に、この末日の神権時代の鍵  
を汝の手に委す。これによりて汝らは、  
主の大いなるおそるべき日のすでに近  
づきて正に門口にあるを知るを得ん。」  
(教義と聖約110:14-16)

この予言の成就に伴い、以前に存在  
していた神権の力がすべて再び地上に  
回復された。そして数々の神殿が建て  
られており、信仰と正しい生活によっ  
て資格を得た人々のために、神殿の中  
でこれら完全な神権の儀式が執行され  
るようになった。救い主が再び来られ  
るに先立って、偉大な神権の業を進め  
るために私たちに力が授けられてきた。  
私たちは、真実の族長制度の状態で家  
族を共に結ばなければならない。そう  
するときに、ふさわしければ、私たち  
は神の子として骨肉の復活体を持って  
日の光栄の王国に住み、永遠の父なる  
神のすぐみもとで永遠に暮らす特権に  
あずかるのである。

再び神の予言者に回復されたこの神  
権の力を通して、私たちは地上で家族  
として結ばれ、その結び固めは天上で  
も効力あるものとなるのである。イエ  
ス・キリストより承認を得た弟子であ  
る私たちは、自分のこの世の家族だけ  
でなく、すでに亡き先祖に対しても、  
救い手となって自分の受けた同じ特権  
を与えることができる。そのために必  
要なものは、やめがエリヤのために  
行なったように、この約束が成就す  
という素朴な信仰を行使することだけ  
である。彼女は神を信じる信仰のしる  
しとして、持っていた最後の食物を与  
えた。しかし、神は私たちに豊かに時と  
財とを与えて下さっている。従って私  
たちはその中から幾ばくかの時間と私  
財とを捧げて、現代の予言者の指示の  
下に、生者と死者のためのこの霊的な  
業を果たすことは容易である。これら  
現代の予言者は、テシベビとエリヤが  
持っていたと同じ完全な神権の力を所  
有している。キンボール大管長は、地  
上でつなぐことは天でもつながれると  
いう、この結び固めの権能の鍵を持  
っているのである。キンボール大管長が  
神のまことの予言者であることを証す  
る。イエス・キリストのみ名によって  
申し上げる。アーメン。



# 少年には男らしさの模範が必要である

いかなる少年も、立派な導き手のもたらす祝福から放置されてはならない

十二使徒評議員会補助  
マリオン・D・ハンクス



若い方々の中で、いや、多少年配の方でも茶色の皮ジャケットを着た男の話聞いたことのある人は少ないと思う。著名なある外科医の家に、ある晩、友人の医者から電話がかかってきた。幼ない子供がかつぎ込まれてきたが、その子を救うためには外科専門医の助けが必要とのことであった。病院は町の反対側でかなりの距離があった。そこで彼は安全に気を配りながら全速力で車を走らせた。ところがある信号で止まったときに、茶色の皮ジャケットを着たひとりの男が車のドアを開け、彼の横にすべり込んできた。ポケットに突っ込んだ手には銃が握られているようであった。男は興奮気味に、医者に車から降りるように命じた。議論の余地は全くなかった。仕方なく彼はハイウェイに降り立ち、茶色の皮ジャケットの男が車で走り去るのを見送った。

彼はやっとのことで病院にたどり着いた。しかし時はすでに遅かった。彼の到着するほんの少し前に、その子は息をひきとったのである。別の医者から彼に、その子の父親と一緒に会って、慰めの言葉をかけてあげてほしいと頼んだ。そしてふたりは待合室に入って行った。すると父親が彼の方に向かって歩いて来た。何とその父親は、あの茶色の皮ジャケットの男だったのである。

今夜この会場にいる人々も、これとは違った意味で、茶色の皮ジャケットの男となつてはいないだろうか。決してそうしようとは思わないのだろうが、自分の子供が霊的な助けを必要としているときに、知恵が不足しているために、知らず知らずのうちに助けの手を遮断してしまうことがないだろうか。若い人々であれば、誘惑に陥って道を踏み誤り、将来いつか持つ子供たちに害を及ぼすような状態に至つてはないだろうか。

今夜のこの大切な集会では、神の王国に非常に大きな神権の力が備わっていることを耳にし、心に力強さと励みを覚えている。それと同時に今日の世界で最も必要とされているものを満たす力が教会にあること、また教会にはそれを助ける能力があり、大きな影響力を及ぼせることも、この大会で明らかになった。世界が現在必要としているものとは、成人への過渡期にある少年たちに、まことの男らしさの模範を示すことである。

理由はともあれ、家庭に父親がいないこと、また少年たちの生活にしっかりした父親像と父親本来の影響力が欠如していることが、今日の社会に大きな問題の要因となっていることは明らかである。しかし私は強い確信を抱いている。教会員の家庭にあつて教会の神権指導者の働きに

頼れば、問題は必ず正しく解決ができるのである。そして行動を起こささえすれば、このチャレンジに応えることができるのである。

本当に少年の価値を知っているのは神のみである。しかし私たちも父親である。従つて私たちも多少はそれを理解している。少年は少年自身にとって貴重であるばかりでなく、すべての者にとつても掛替えのない存在である。少年はみな、成長の過程に見聞きした過去を内に宿し、現在に影響を及ぼす力を備えて生きている。さらに、将来芽生える種を自らの内に持ち、ありのままの現実に直面しているのである。特別な事態が生じない限り、少年はいつか父と呼ばれるようになり、そのように呼ぶ子供たちと将来の社会に対して、大切な責任を負うのである。

従つて少年は、物事の道理を教えてくれる人、社会的精神的な成長を促し、少年を幅広い人間にしてくれる人、一人前の男性としての技量を身につける機会を与える諸々の活動の必要性を理解していつも身近にいてくれる人を必要としている。また、少年を愛し、自らも少年に愛されている人、男性はいかにあるべきかとの模範を示してくれる人を必要としているのである。父親はこのような人でなければならない。またこのような父親に恵まれている少年は本当

に幸いである。しかし当然のことながら、このような家族であっても、真心から関心を払ってくれる善良な人々の援助と協力を受けることができるのである。では、父親のいない少年、あるいは父親がいながら本来その父親から受けるはずのものを受けていない少年についてはどうだろうか。この少年のために、主はこれまでになくすばらしいプログラムを与えて下さったと思う。それは、監督や副監督、アドバイザー、教師、スカウト隊長、リーダー、ホーム・ティーチャー、コーチと接するプログラムである。これらの人々は心から少年に関心を払っている人々である。もし主のプログラムが効果的に運営されたら、教会員の少年はひとりといえども、これら立派な人々のもたらす祝福に文字通りあずからずに放置されることはないはずである。そしてすべての少年が、彼の福利に積極的に関心を寄せている善良な人々数人と身近に接するのである。私は自分の所属しているすばらしいワード部と、私の息子や他の少年たちに関心を寄せてくれる立派な男性の方々に感謝している。

だからといって、少年を導くにあたって、母親やその他すばらしい婦人たちが及ぼす大きな影響力を忘れていたわけではない。私はだれにも劣らずそれを感謝しているつもりである。けれども少年をおとなにするのは男性に限る。母親でさえ、自分ひとりではできないのである。確かに、自分ひとりの努力ではだれもそれを成し遂げられないに違いないし、学校やその他の教育機関でも不可能であろう。少年は男性を必要としているのである。

父親と神権を持つ男性にこの務めがあることは、事実明らかである。数多くの家庭、町内、あらゆる社会、あらゆるワード部、支部に、男性の助けを必要としている少年がおり、少年を助ける男性を必要としている母親がいる。

もし少年が立派な父親や誠実に対処してくれる人々から、自分の必要としているものを得ず、彼らのもた

らす祝福を享受しなかったら、一体どうなるであろうか。彼は自分と同じように無知で経験の浅い他の若者から対処するすべを即席に学ぶに違いない。また少年は、街角や学校で人の成功は人格や人徳ではなく物質的、性的、経済的な面の行為によって測られるという誤説を学ぶことであろう。

さて兄弟たち、現在行なっている方法を改善するためには、どんなプログラムに従わなければならないだろうか。今夜この時間を割いて、数ある答えの中からひとつだけを、しかもその糸口となる部分のみを考えてみたいと思う。しかしこれはとても大切である。従って是非理解していただきたい。

モルモン経アルマ書36章の中に、すべての父親、あるいは父親に代わる人々にとっても有意義な教えがある。アルマが息子ヒラマンに、信仰と悔改めについて力強い証を述べている箇所である。アルマは若い頃反抗的で、数々の重大な過ちを犯していたことを思い起こしてほしい。アルマは息子に、同じ過ちを犯さず、また自分が神のやさしい慈悲について知ったことを、自分のような恐ろしく苦しい経験などせずそのまま理解してほしいと語っている。アルマは非常に率直な言葉で、自分の経験した苦痛について証し、ヒラマンに3つの大切な教えを与えている。父親はみな、同じ教えを自分の息子に与えたいことだろう。私は自分の息子に今夜この言葉を贈りたい。そしてあなた方も同じようにしていただければと思う。

1. 「わが子ヒラマンよ。汝はまだ青年であるから、汝が私の言葉を聞いて私に学ぶよう、ひたすらこれを汝にすすめる。すべて神に頼る者は、苦しみ悩み禍に逢う時に助けられてこれらを忍ぶことができ、また終りの日に高く挙げられる。これを私は確に知っている。

しかし、私は肉体上の力で自分でこれを知るのではない。私の霊の力でこれを知るのである。肉欲の心でこれを知るのではない。神によってこれを知るのである。私は汝にこれを

よく解って欲しい。」(アルマ36:3,4)

さらにアルマは教えを続けている。従って私もそうしたい。

2. 「まことに……私は人々を悔い改めさせ、私と同じ喜びを感じさせるために、またこれらの人も神によって生れ聖霊に満されるようにたえずはげんで働いた。

さてわが子よ、見よ、主は私の働きから生じた結果によって私を非常に喜ばせたもう。

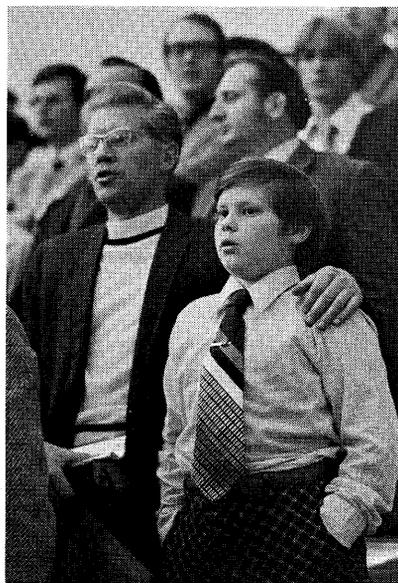
主が私に下したもうた御言葉のために多くの人々は神によって生れ、私の味わったように味わい、私が目のあたりに見たように見た。それであるから、これらの人は私が知っていると同じ通りに今私の話したことを知っている。私のもっているこの知識はすなわち神から与えられたものである。」(アルマ36:24-26)

しかし、これだけでは充分ではなく、次の教えが与えられている。

3. 「見よ。わが子よ。またこればかりではない。お前がもし神の命令に従うなら地に於て必ず栄えることと、もし神の命令に従わないならば神の前から追い払われることを私は知っている……。」(アルマ36:30)

このように、ひとりの父親がその息子に証を述べた。

私たちがこれまでに得てきた福音の知識と証を自分の中のみにとどめておいたり、他の人々に述べながら自分の子供たちには述べなかったりしたら、愚かというそしりを免れな



いだろう。子供たちは、他の人々以上に、私たちからこれを受けることを必要としており、またそれがふさわしいのである。

この点で、茶の皮ジャケットの男のようになっている人がいるのではないだろうか。

モルモン経中の数多くの力強い教えは、父親が愛する息子に語ったものであるということに、あなた方は気づいているだろうか。リーハイ、ヤコブ、ベンジャミン、アルマ、ヒラマン、モルモンたちはみな、それぞれの息子たちにすばらしい教訓を与えた。

アルマの息子コリアントンの犯した悲しい過ちを覚えているだろうか。彼は高慢、頑固で、他の多くの人々が罪を犯していることを口実に自分の罪を正当化している。アルマはこの息子の行為の重大さをはっきり指摘して、彼に悔改めるよう告げ、キリストの贖罪の意味を教えた。そして息子に従うべき道を示し、心にある思いを次のように語った。

「主の『みたま』は今『汝の子ら』が多くの人々の心を誘って亡ぼさぬように、善を行うことをかれらに命ぜよ」と私に告げたもう。それであるから私は神を畏れて次の命令をお前に与える。お前はその悪事をやめ、心と勢いと力とを尽して主に立ち帰れ……。」（アルマ39：12, 13）

これは罪人と、罪人を助けようとする者にとって大きな教訓である。と同時に、不道徳に走っている息子を持ちながら、伝道の業を進めなければならない忠実な父親の、悲愴でしかも最も感動的な言葉がそこにかかえるのである。彼はこう言っている。「かれらはお前の悪い行いを見て私の言うことを信じなかった。」（アルマ39：11）

もちろんモルモン経には、父親の教えを心に留め、父親が実際に望んでいるような人生を送ろうと若いうちに決意した若者がいたことも記されている。その若者は次のように記録している。

「このころ、私ニーファイはまだ大そう若かったが、もう身のたけは

高くまた神の奥義をしきりに知りたいた願っていたから心から主に向けて祈った。ところがごらん、主は真実まことに私を訪れたまい私の心を和げたもうたから、私は父がこれまでに語った言葉をみな信じた。……」（Iニーファイ2：16）

ニーファイは数多くの偉業を成し遂げたが、その中で最も印象深いのは、一行が狩りの道具を失って飢えに直面したときに、不平を言っていた父親を助けたことである。あなた方も知っての通り、ニーファイはそれまでに幾度か奇しき靈的な経験に恵まれてきた。けれども彼は父を愛していたので、父を批判したり、父の立場を奪ったりせずに、父のもとに行き行って自尊心と自信とを取り戻す仲立ちとなろうとしたのであった。彼は父リーハイに、どこで狩りをすればよいか神に尋ねてくれるよう頼んだ。このように息子の支持を受けたリーハイは、信仰を新たにし、再び一行を率いる力を取り戻したのである。この話自体はモルモン経の中でもささいな出来事に属するものだが、教訓としては決してささいなものではない。事がうまく運ばず、自己不信にさいなまれている人に対し、非難すべき点には目もくれず信頼を寄せることは、決して小さなことではないからである。

そのように聖典は、若人に成人した者の感化力と責任を認めさせ、また現在若人を導く責任を与えられている者に道を示す上で、すばらしい力の源である。しかし実際のところ、あまり利用されていないようである。私たちはこの源をどのように活用しているだろうか。

フィオレロ・ラグアルディア氏は、イタリア系移民で、ニューヨークの歴史中、最も高潔で多くの影響を及ぼした市長である。彼がまだ若く、判事をしていたときに、ひとりの男が彼の法廷で窃盗罪を宣告された。その若い判事は、禁固刑を課そうと考えた。けれども、その男が貧しい家族を養うために食べ物盗んだと知ったときに、彼は禁固刑の一文を削除した。その上、家族を養うため

にパンを盗まなければならない都市に住んでいることに対し、法廷内の全員に罰金を科したのである。理由はともあれ、若者に生命のパンを与えなかった両親や教師、その他のおとなが、そのような罰金を課せられないで正しとされる日が来ると、だれが言えるだろうか。

おそらく兄弟たちはみな、これから話す自動車の話を理解いただけるものと思う。ある若者が父親に自動車をねだった。そこで父親は、それを持つに値したら誕生日に買ってあげようと約束した。

「分別のある人々とつき合い、分別のあることをすればよい。そうしたら、誕生日にお前のほしい車をあげよう」と父親は言った。そこで少年はどんな自動車がほしいか細かい点まで説明し、装備品に至るまですべて話した。そして、分別ある人々とつき合い、分別のあることを行なうと、その日の来るのを待った。やっとその日が来た。彼は窓の外を見た。すると夢にまで見た自動車がそこにあった。それは彼が心に描いていたそのままの自動車だった。彼は父親にあらん限りの愛と感謝を述べると、すぐに外に駆け出した。そしてひと通りそれを眺めまわすと、キーをもらいに父親のところへ引き返した。

「キーだって？」父親は言った。「あー、キーね。ところでお前に言っておくが、自動車は確かにお前のものだ。長い間お前はのために準備したんだからね。それはとても価値があって、とても大切だ。それをとても上手に使えることも知ってる。だが今はまだキーを預かっておこう。自動車を使えるときがきたら知らせてあげるよ。お前はあれが自分の車だってだれにでも言っているよ。だが、まだ使っちゃダメだ。」

少年は約束以上のものを必要としており、名前以上のものを必要としている。つまり、力を試し、能力を使い、神権を使う必要があるのである。

もちろんあなた方若人も、これらの点で非常に大きな責任を負ってい

る。多くの若人が、主からすばらしい賜を与えられ、それを用いる機会に恵まれてきた。あなた方の感謝の心、神の祝福を尊重する気持、責任を思慮深く受け入れる態度、すばらしい奉仕、ユーモアのセンス、これらすべては私たちを強め、励まし、私たちに大きな誇りを抱かせるのである。

わずか数日前のことであるが、ある立派なステーク部長から彼の悩みを聞いた。その悩みというのは、彼の息子が成績表に「C」をもらってきたというのである。彼は息子を勉強室に連れて行き、成績表を見せながら、厳しい口調で尋ねた。「この成績表はどうしたんだ」と息子に「立派なものでしょう、お父さん。Aが3つもあるよ」と答えた。父親はCが気になるものであるし、息子にしてみればAを見てほしいと思うのは自然である。この点を理解すれば、両方とももっと祝福されようというものであろう。

最後に、偉大なふたりの父親の話を少ししたいと思う。

ある若者が、日曜学校で話の責任を与えられて説教台の前に立った。しかし話を切り出すことができな

った。すると体の大きな父親が会衆の中で立ち上がり、息子のところに歩み寄って、息子に腕をまわして言った。「ラリーは話の準備をしてくれたので話はできるのですが、少しおびえてるんです。ですから私がちょっと皆さんに話したら、ラリーも心の準備ができると思います。」こうして彼は息子の体に腕をまわして息子の横に立っていた。すると間もなくその少年は話し始めた。それを見て多くの人々が感動の涙を流した。

少し前のこと、私はある少年に出会った。そして今週、その家族を交えて彼と過ごす機会があった。この少年は筋肉萎縮症を病んでいる。けれどもすばらしい若者で、ワード部の全員に愛されている。彼は友だちのすることを何でもしたいといつも思ってきた。そしてカブスカウトも経験し、現在一級スカウトで、さらに進級をめざして頑張っている。

ジェイは執事のときに、他の少年たちと一緒に聖餐のパスをした。彼は立つことも歩くこともできない。そこで父親がその強い腕をジェイの腰にまわして支え、他の少年たちと並べさせた。そして、ジェイの手はトレイを支えることができないので、父親がそれを手伝った。ジェイが聖餐をパスするときには、父親が彼を支えて一列一列渡したのであった。ジェイはまた、執事として、断食献金を集める大切な責任も果たした。彼の父親は一軒一軒彼を運んだ。あなた方は玄関先に立つ親子の情景を心に描くことができるであろうか。

ジェイは強い証を持っている。そしてその態度と顔つきは驚くばかりである。話も上手にする。歌も歌ってきた。彼がこれらの責任を果たすときには、いつも父親がそばにいて彼を腕で支え、彼の傍らに立って支えている。

私はこれまでに、これほど快い、感動を呼ぶ話を聞いたことがない。神がこのような父親を祝福され、このような息子に恵みを与えられるように願っている。なすべき多くのことがありながら、あまり時間のない私たちに、神が恵みをたれたもうよ

うに。そして私たちが自分の息子に今一度目を注ぎ、また家族外でさらに何らかの助けを必要としている少年がいれば、彼にも関心が払えるように願っている。神の恵みが少年たちにあり、彼らが父親に感謝し、忍耐強く、慈悲深く、寛容であるように。神が現在も将来にもわたって兄弟たち全員を祝福され、兄弟たちがいつも神の望みに従い、他の人々に特別な恵みをもたらす仲立ちとして働けるよう願っている。

父親ならびに神権指導者の皆さん、若人は模範を必要としている。身近な人々の告げる無言の説教こそが、最も明瞭に聞こえ、最も大きな力を与えるものである。若人が真の価値を認めるのは、耳から入った原則ではない。「彼らは倫理の原則は学ばない。倫理に沿った（あるいは非倫理的な）人々の模範に倣うのである。彼らは伸ばしたいと思う特質を分析したり、書き連ねたりはしない。それらの特質を身につけていると思われる人々を選び出すのである。」

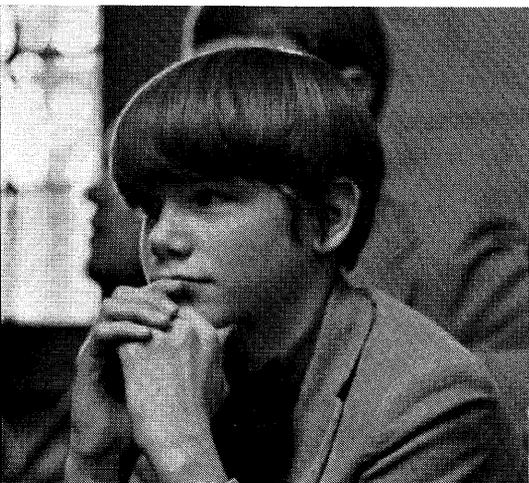
（ジョン・ガードナー、「自己の刷新」〔英文〕P124）少年が必要としているものは、愛や人間関係、あるいは神についての講義ではない。無条件の愛、無私の奉仕を実際自分の目で見ること、畏敬と礼拝と謙遜な祈りの中に神の存在を認めることである。そしてこれこそが、少年がおとなの最善の模範を必要としている理由なのである。私の話を終えるにあたって、若人たちよ、モロナイの次の言葉を聞いていただきたい。

「……不完全な所があるからと言って非難するな。むしろ神が私たちの不完全な所をあなたたちに知らせ、あなたたちに私たちよりもっと賢い者になる道を学ばせたもう神のめぐみに感謝せよ。」（モルモン9：31）

また、年長の方々には、古代の記録から次の言葉を送りたい。

「この子供を連れずに、どうしてわたしは父のもとに上り行くことができましょう……。」

イエス・キリストのみ名によってアーメン。



# 墓での三日間

復活することにより全人類は永遠に  
進歩することができる

大祝福師

エルドレッド・G・スミス

昨年の春、私は妻と共に聖地を訪れるというすばらしい機会に恵まれた。エルサレム滞在中の最後の日、私たちは朝早くホテルを出て墓の園に歩いて行った。大変うれしかったことには、園には私たちのほかだれひとりいなかった。私たちの心は畏敬の念に満たされゴルゴタ、すなわち、されこうべの場にじっと見入っていると、私たちはそこに3本の十字架が並び苦悶されたキリストの上の方に「これはユダヤ人の王イエス」（マタイ27：37参照）と書いた罪状書きがありありと心に思い浮かんできた。そして「私たちは、私たちのために払われたあのイエスの苦しみにふさわしくあるだろうか」という思いにふとかられた。

それから私たちは、歴史上はアリマタヤのヨセフの所有となっている例の墓に目を転じた。ヨセフとニコデモは、女の手を借りて、この墓にイエスを葬った。弟子たちはイエスを後にしてその場を去った。彼らは墓の入口に石をころがしてふさぎ、そして皆帰って行ったが、マグダラのマリヤとほかのマリヤとはそこにいた。（マタイ27：60、61参照）ふたりは墓のそばに身を寄せ合ってすわり、じっと墓を見つめていた。

私たちは聖典の中に、エルサレムに大破壊があって、神殿の幕が「真二つに裂けた」（マタイ27：51）ことを知らされている。しかしこの大陸における破壊の様は、それをはるかにしのぐものであった。地が激しく揺れ動き、3時間のうちに町は崩壊し、あるものは埋没し、あるものは焼失した。また都市のあった所に山が生じた。嵐、大



風が止んでから全地は深い暗黒の霧に覆われた。3時間にわたる崩壊の後、このような暗黒は3日の間続いた。そしてその間人々には声、ただ御一方の声しか届かなかった。イエスは御自身を明らかにして言われた。

「見よ、われは神の子イエス・キリストなり。われは天地とその中にある

万物を造れり。われは最初より御父と共に在りき。而して今、われは御父に在り、御父はわれにまします。御父はすでにわれによりてその御名の栄えを示したまえり。

われは、わが民のところへ降りしが、わが民はわれを受け容れざりき。すなわち、われが来ることを示す聖文はすでに事実となりたり。」（Ⅲニーファイ9：15、16）

イエスは民に、破壊が起こったのは彼らの罪悪のためであり、ひとときわ義しい人たちのみ災いをさけられたのだと告げられた。また、復活の後の御自身の訪問に備えさせるため、民に、悔い改めよ、そうするならば受け入れられるであろう、という言葉を残された。

また声はモーセの律法にふれて、この律法はイエス御自身によって全うされたことを告げた。「これより後、汝らは血を流すことを以てわれにいけにえを供うべからず。われはもはや汝らのもろもろのいけにえと火祭とを正当なるものとして受け容れざればことごとくこれらを廃めよ。

これより後、犠牲としてわれに捧ぐ

べきものは、真にへりくだる心と悔いる精神なり……。」(Ⅲニーファイ9：19, 20)

主はみ業を進めておられたとき、2度「『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』……。」

体が墓に横たえられていた間のイエスのもうひとつの大切な働きは、死者の霊を訪れることであった。主はあるときこう言われた。「よくよくあなたがたに言うておく。死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでに来ている。そして聞く人は生きるであろう。」(ヨハネ5：25)

十字架にかけられているとき、イエスは、罪の宣告を受けたがイエスを信じた強盗に向かって言われた。「よく

言うておくが、あなたはきょう、わたしと一諸にパラダイスにいるであろう。」(ルカ23：43)

ペテロは言った。「キリストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは義なるかたであるのに、不義なる人々のために、ひとたび罪のゆえに死なれた。ただし、肉においては殺されたが、霊においては生かされたのである。

こうして、彼は獄に捕われている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをされた。

これらの霊というのは、むかしノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。その箱舟に乗

り込み、水を経て救われたのは、わずかに八名だけであった。」(Ⅰペテロ3：18-20)

これは福音の重要な原則である。この原則によって、全人類は福音を聴き、受け入れ、そして死後も進歩を続けるという機会を与えられるのである。

ペテロはこのようにも語っている。「死人にさえ福音が宣べ伝えられたのは、彼らは肉においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神に従って生きるようになるためである。」

(Ⅰペテロ4：6)

キリストの体が墓に横たわっていた間にふたつの非常に不思議なことが起こった。そのひとつは、人々に教えるを説き、もはやいけにえを受け入れずと告げる主のみ声がこの大陸の住民に聞こえたことである。このとき主はまだ復活しておられなかったことを覚えていただきたい。主は復活された後再びこの地を訪れ、御自身を示され、人々に教えるを説かれた。2番目は、救い主が獄に捕われている霊たちに宣べ伝えられたということである。

3日目に、ひとりの天使が降って来て、墓をふさいである石を転がした。私と妻はその朝、園の中を散策しながら容易にそこに置いてあった石を思い浮かべることができた。墓の入口は切り立った丘の斜面に開かれていた。その入口は小さく、前にはくぼみがあった。そのくぼみを使って石を移動し、開閉をしたのであろう。

私たちはそこで、週の初めの日の明け方にマグダラのマリヤとほかの女たちがイエスの死体を清めるために香料を持って墓に行くと、石がとりのけて



あるのに気づいたというところを思い出した。彼女たちが見ていると、ひとりの天使が女たちに向かって、イエスはよみがえられたのだと言った。そして、「行って弟子たちにイエスはよみがえられたと告げよ」と言った。

マリヤはペテロとヨハネを見つけ、天使から言われたことをふたりに話した。ふたりは走り出したが、年の若いヨハネの方が先に着き、墓の中をのぞいてみたが中へは入らず、ペテロがやってきてから彼の後に入った。墓に入って見ると、イエスの体はなく、亜麻布がきちんとたたんでおいてあった。それからペテロとヨハネは自分の家に帰って行った。「しかし、彼らは死人のうちからイエスがよみがえるべきことをした聖句を、まだ悟っていなかった」(ヨハネ20:9)のである。

「しかし、マリヤは墓の外に立って泣いていた。そして泣きながら、身をかかめて墓の中をのぞくと、

白い衣を着たふたりの御使が、イエスの死体のおかれていた場所に、ひとり頭の方に、ひとり足の方に、すわっているのを見た。

すると、彼らはマリヤに、『女よ、なぜ泣いているのか』と言った。マリヤは彼らに言った、『だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです』。

そう言って、うしろをふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。

イエスは女に言われた、『女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか』。マリヤはその人が園の番人だ

と思って言った、『もしあなたが、あのかたを移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります』。イエスは彼女に『マリヤよ』と言われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってへブル語で『ラボニ』と言った。それは先生という意味である。

イエスは彼女に言われた、『わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、「わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く」と、彼らに伝えなさい』(ヨハネ20:17)

墓に来ていたほかの女たちは、天使から弟子たちの所に行ってイエスはよみがえられたと告げよ、と言われていた。すると途中イエスは彼らに出合って、「『平安あれ』と言われたので、彼らは近寄りイエスのみ足をいだいて拝した」(マタイ28:9)

彼らはそこでも、兄弟たちの所に行って告げるように言われた。

イエスは、トマスと首をつって死んだユダを除く弟子たち全員に姿を現わされた。そして後に、トマスも含めたすべての弟子たちにお現われになった。

「イエスは彼に言われた、『あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである』」(ヨハネ20:29)

イエスは幾度も弟子たちに会われ、ガリラヤでは五百人にのぼる人々の前に姿を現わされた。そればかりか、このアメリカ大陸の住民にもその姿を現

わされたのである。その様子はモルモン経に記されている。

園の中を散策していたのは、妻のジーンと私のふたりだけだった。私たちは墓の方に近づいて行った。そして主が、「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」(ヨハネ14:27)と言われた、その安らぎの心というものを感じたのだった。

私たちは、イエスがマルタに「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる」(ヨハネ11:25)と言われたことを心から信じることができた。

イエスの復活により、全人類は永遠に進歩できるようになった。イエスは私たちが進み進んで永遠に進歩できる道を開いてくださったのである。

私は、自分が初めてニューヨーク西部にある聖なる森を訪れたときに感じたと同じような気持ちに襲われた。私はある日の早朝ひとりきりであの森に出かけた。そして、キリストが園でマリヤに会われたように、まさしく御父と御子が少年ジョセフ・スミスに姿を示されたという証を得たのであった。

まさしくイエスは生きておられる。そしてこの地上に神の王国を再び確立し、栄光のうちに来臨して地を治めるための備えをされたのである。

神が私たちに、そのみこころを理解するための知識と理解力とを、また主の教えに従って生きる希望と力とをたまわらんことを。イエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。



こんばんわ  
神様の言葉を  
伝えにきました

吉岡公夫(山口支部)

私がこの教会の会員となることが出来たのが、1973年7月1日です。

幼少時代は、身体が非常に弱く、小学校二年生になっても、普通食が食べられず、昼の弁当は、いつも母がお粥を炊いて持って来たものを食べていました。

また近い親類でお寺が4軒、その他の親類で2軒全部で6軒有り、もう1人の従兄弟は、八幡宮の宮司をしております。そのような状況でしたから、小さい時から宗教的な影響を強く受けていました。当時弱々しいながら生きているのは、この世に生れて来た特別な使命が自分に有るのではないか、それは何かと、私なりに考えておりました。そのうち身体もやや普通に近くなり学校も卒業して社会に出て勤めはじめ、その日の生活に追われて行くうち何んとなく40歳になっていました。

そしてまた、人生とは、人間の幸福とは、未来はどうなるかと種々考えるようになりました。自分の今迄を振り返って見ますと、麻雀、将棋、碁、トランプ、花札、ゴルフ、ボーリング等下手の横好きで何んでもやりましたし、また酒は少々飲める方で一、二合では味が無く、三、四合で味がわかり、四、五合でようやく、美味しくなると云う有様でした。しかし快樂の時は過ぎ、飲んでもその後における充実感は無く、ただ空しさのみが残るようになりました。そこで青春時代の本や新しい本を買い、時には図書館にも行き仏教の勉強をしました。ところが、この世は修業の世であり、その報いは必ず来世において償うものである。人間は非常に罪深くとても救われ得ない、ただ信んずる信

仰にのみ救われる。そして良い事をしなさい、悪いことをしてはいけません。

良いこと、悪いことの尺度、考えれば考えるほど難しくなり、やり切れなくなりました。心を落ちつけ静かにものを見る意味で、お寺にて座禅を試みることにしました。朝は6時にお寺に参り、座禅を組み、お経を読み、そして作務すなわち作業掃除、それが終わりますと学務すなわち論語の勉強と少しの仏典の勉強、これが終わりますとようやく朝食です。これが非常に作法が厳しく食べるものはお粥に精進料理、そこで一段落して、別室にてお茶を一服喫ましてお寺を後にします。

こう書きますと、いかにも充実した朝の一時に見えますが、あにはからんや、座禅の時には心頭を滅却する所ではなく、日頃考えないことが次ぎ次ぎと思ひ出され考え、心に思いが湧き心が落ちつきません。

真理と云う言葉は良く耳にします。私も真理とは何んであるか種々と求めましたが、良くわかりません。不安な日が過ぎて行きました。

忘れもしません。その日は1973年3月9日、雨の降る夜でした。ドアを叩く音がしますので、ドアを開けて見ますと若い外人さんと日本の青年が立っていました。「こんばんはお邪魔をしてもよろしいでしょうか。私たちは神様の言葉を伝えに来ました」

私は「はっと」しました。そしてすぐに部屋に上っていただきました。その晩すぐ私は人間の現世の目的や仏教上の疑問点につき種々質問し、特に現世と来世について聞きました。その若い二人の青年は静かに聞いてくれましたが、「私たちは仏教のことは知りませんが、私たちの教会の教えはこうです」と云われたことは「救いの計画」でした。それは見事に私の知りたいことを「ずばり」と云われました。

私は非常にこれらの事柄について知りたく、その夜「モルモン経」を買い読む決心をしました。そして一週間に2日、訪問して頂くことにしました。

そんなある日、神様の奥義が知りたければ、神の宮居、すなわち自分の肉体を清くしなければなりません。それにはまず「知恵の言葉」を守るように云われました。御承知のとおり良く飲む方でしたので、一生の間止められるかどうか、非常に不安でした。また一方では、奥義とやらを知りたい気持が有りました。そしてついに知恵の言葉を守る決心をしました。丁度私が転勤の辞令を頂いて10日目の頃

でした。その後4月、5月の2ヵ月で公私を合せ、約十数回宴会が有りました。しかしよくお祈りして、その宴席に出ますと不思議に結果は非常によく、知恵の言葉を守ることが出来ました。そしてバプテスマを受けることが出来ました。その後数ヵ月が経過した或る日の宴の席において、会社の上司から、君は今迄良く酒を飲まなかった。もう今日は一寸ぐらいなら良いのではないかと云われ、びっくりしました。考えて見ますとその日はお祈りもせずに、サタンの集まりのような宴会の席に出席したのです。あわてて心の底で一生懸命お祈りしまして、ようやくピンチを脱することが出来ました。「祈りほど大切なものは有りません。謙遜になって祈る時、それは良く導きを得られます。

教義と聖約89章18～20節に「およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い、この誠命に従って歩むすべての聖徒らは、そのへそに健康を受けその骨に髓を受けん。また智恵と知識の大なる宝まことに秘れたる宝を見出さん。而して走れども疲れず、歩けども気を失うことなからん。」

私は当時最高血圧140mm、最低血圧102～105mmであり、また肝機障害のレットルが貼られておりました。ところが現在は、最高血圧125mm、最低血圧85～90mmと下がりました。

「すべてわれによりて祝福を受けんと願う者は、その祝福を与うために定められたる律法と条件を創世の前より定められたるまに守らざるべからず。」(教義と聖約132:5)

私たちは皆、主と誓約を交わしています。これらの誠命や誓約は決して苦しいものではなく、重荷になるものではありません。むしろ反対に私たちを啓発し、また安心感を与えてくれる有益なものであることを信じます。

妻と共にバプテスマを受ける時、両親に話をしました。父は80歳ですが「公夫が良いと思うことは間違いないと思う。考えてみるとお前が小さい時には、いつ死ぬかとそればかりを思っていたが、その教会に入る事がこの世における責任であったのではないかと思う。私も老いてはいるが、良く分るように教えて欲しい。」また母は、「宗教はその人の自由意志で決めるべきであり、しっかりやりなさい」といわれ、了解されました。私は両親に感謝するとともに、この祝福を与えられました神様に感謝します。

神様は生きていらっしゃる。そして常に暖かい慈悲の目で見守っておられます。

これらのことをすべて、イエス・キリストのみ名によってお話ししました。アーメン。



## 宣教師の 経験に学ぶ

羽田節子

(東京オ4ワード部)

伝道にでたすべての人は「与えるだけでなく、多くのものを得て帰って来る」ことをご存知でしょう。わたしも伝道期間に強い証詞と多くの喜びを経験して帰ってきました。福音を伝える喜びを知ったばかりでなく、伝道部長や宣教師、各地の兄弟姉妹から多くのことを学び、証詞を強め、主の導きやみたまのささやきを知ったのはこの伝道生活でした。いろいろなことを学びましたが、その中でもっとも大きなことは、伝道に出る前には考えつかなかったことです。私の両親を通して天父の愛を知ったことです。

20歳の誕生日を迎えるころ、私の心には「来年伝道にしたい」という強い気持ちがわいてきました。学校ではちょうど進級、就職とわかれる時でした。半分の授業料を準備してくれた両親に、「来年伝道に出たいから、4月から働きます」と話しました。両親は、学校をやめることはもちろん、伝道にでることに反対でした。しかしわたしは、伝道資金のために仕事を探しました。当時のわたしには父が一週間口を聞かなくても、両親を理解しようとする気持のゆとりはありませんでした。

そんな時、ステーキ部宣教師の責任が与えられました。昼間は会社、夜は伝道という日が続き、福音を伝えるすばらしさを知りました。

もうすぐ21歳の誕生日という時、「監督さん、伝道に出られる手続きをお願いします」と言ったところ、「資金はできましたか。ご両親の承諾は得られましたか。家族の人から少しでも資金を援助してもらえると、家族のみなさんが祝福をうけますよ」と話してくださいました。伝道中の子供のために一生懸命働いて仕送りし、多くの祝福をうけたというあるご両親の証を思い出しました。家族も祝福をうける。私の心に家族を思う気持ちが再び湧いてきました。

「伝道にでるのを反対しているのに伝道資金を援助してあげられるはずがないでしょう。」これが両親のあっさりした答えでした。「少しぐらいのお金なら毎月送ってあげるわよ」と言ってくれた姉たちにはげまされ、面接を待っていましたが、面接の日のはびのびになりました。しかしそののびのびになったことで、わたしはひとつの証を得ました。いよいよ明日が面接という時、母の方から伝道資金の申し出があったのです。伝道資金は倍になりました。両親に感謝する気持ちはありましたが、まだ彼らのもっと深い気持ちを知りませんでした。

明日はいよいよ出発という日の朝、起きて下に降りて行ったわたしはいつものように「お母さんおはよう」と声をかけました。しかし、母のおはようという声はありません。だまっている母に「ごめんね、朝寝ぼうしちゃった」と語りかけましたが、母の「おはよう」という声はありません。私にかえてきたのは、「あなたが明日から行ってしまうと思う」という泣き声と涙でした。母の涙は冠婚葬祭のためのものと思っていただけに、私は非常におどろきました。その翌日には、「おれは、見送りになぞいかんぞ」と言っていた父も、スーツケースを車にのせ、見送りにきてくれました。そこで見た父のさみしそうな顔と目にハンカチをあてている母の顔をわたしは忘れることはできません。たった一年半なのに。それから母の言葉を思い出しました。「なぜお父さんが、伝道にでることを許してくれたか知っているの。あなたが、学校へ行きながら朝はやくおきてアルバイトし、また学校が終わってからも働いて伝道資金を用意していたでしょう。それまでして行きたいのならと言って許してくれたのよ」という話でした。

わたしは出発の日をはじめ、両親の気持ちを知りました。わたしのために自分たちの気持ちを犠牲にしてくれた両親の愛を知りました。

一年半の短い期間でしたが、東北、北海道の地で伝道しました。楽しいことばかりではありません。北の地の冬は特に寒く苦しいつらいこともありました。それは「家族」ということについて、いつも考える機会でもありました。レッスンプランにのっとり家族について、主の教える家族について、求道者とともに学びあいました。3人のすばらしい伝道部長は多くのことを教えてくださり、またいつもこう言われました。「羽田姉妹、あなたの家族に毎週手紙を書いていますか」

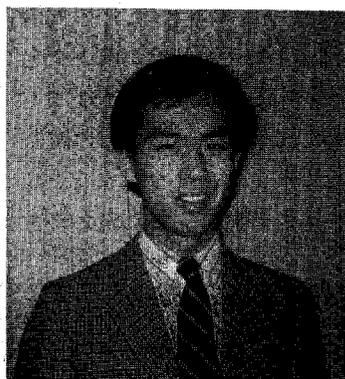
「何が一番大切ですか。家族の昇栄が大切です。家族に福音の喜びを伝えなさい。」

伝道中、常に母から仕送りや手紙をいただきました。たった一回でしたが、父から励ましの電話をいただきました。

伝道中、わたしの両親への気持はまったく変わりました。今、両親に心から感謝しています。彼らの愛の深さを心からよく感じています。今両親をよく理解することができず。二年前、ひとつのことを母からならいました。母にわたしが「三年前、バプテスマを受けることに反対していたのに、どうして急に許してくれたの」と聞いた時です。母の答は、「あなたが断食をしていることを知ったからよ。遅刻をしても朝食を食べていくあなたがほんとうに食べないんですもの。それほどまで受けたいのなら許可してあげようと思ったの。それが親の気持ちよ。」

肉体の両親ですらそのように大きな愛をもって育ててくださる。わたしの両親は末日聖徒ではありません。しかし天父の偉大な愛を教えてくれたのはわたしの両親です。

たしかに宣教師の経験をとおして、わたしは多くのことを学びました。神様が生きていらっしゃる、この教会は神様の真の教会であることを証します。そして神様は、わたしたちの天のお父様でいらっしゃる、わたしたちのことをいつも心配してくださることを証します。



## 只今宣教師 準備中

牟田口宣孝

(横浜ワード部)

私が「宣教師になりたい。あのような素晴らしい宣教師になりたい」と思ったのはバプテスマを受けてしばらくたった高校一年生の秋のことでした。私を教えてくれた宣教師たちの「牟田口兄弟、伝道は素晴らしいですよ。私たちの楽しみはあなたがたの証を聞くことであり、成長をこの目で確かめることです。私達の喜びは父なる神の喜びです。神様はこのようにおっしゃっています。「而して汝らもし生涯今の世の人々に向けて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国に於て彼と共に汝らの悦び如何ばかりぞや」(教義と聖約18:15) 彼らの心からの証は少年時代の私の心を大きく動かしまし

た。「私も宣教師になろう。彼らのような宣教師になろう」と思いました。「人生の中の最も価値ある時期の二年間を神の御業のためにささげた宣教師たちなくして今のこの私の喜びはないのだ。私も宣教師として多くの人達にこのあふれんばかりの喜びを伝えよう」と心に決めたものでした。そして、さっそくその晩父にそのことを話しました。当時、教会についてそれほど関心を示していなかった父はしばらくすると熱もさめるだろうと思っていたらしく、これと違って反対もしませんでした。それからことあるたびに「伝道に出るよ」と言い続けて来た私に、最近父は「おまえはこれから二年間浪人生活をするんだなあー」といいます。父がこのように伝道に対して理解を示してくれるようになった理由の一つは大学受験に成功したことでした。教会の集会に熱心に出席したがために受験に失敗したとなれば、父が伝道に出ることを許してくれるはずがありません。学生にとって勉学はその本分であり、また伝道のための大きな準備の一つです。受験の成功は家族の教会に対する考えを大きく変えました。家族は今心から私に応援をしてくれます。

さて、大学に入学してからの私の成すべきことは、まだ少ししかない伝道資金を貯めることでした。多くの人助けを得て学習塾で子供達に教え、塾が終わってから家庭教師に向かうようになりました。家庭教師が終わる時間にはもうすでにバスがなく自転車で通うこともありました。暗い夜道を雨の中11時過ぎにアパートに帰ることもありました。その時、「なにくそ！負けるものか、宣教師達はいつも街頭で伝道しているんだ。寒い中を自転車に乗って伝道しているんだ」と自分にいい聞かせ頑張り続けました。長期休暇に入ると昼も別の所で働きました。しかし働くことだけが伝道に出る準備ではありません。皆が勉強のことを心配してくれました。夜の時間のほとんどない私にとって勉強する時間は昼間の授業の合い間でした。留年してしまえば家族の教会に対する印象はたちまち悪くなり伝道に出られなくなることは明らかです。しかし、このような私を神様は祝福して下さり、これといった障害はなにも生じていません。

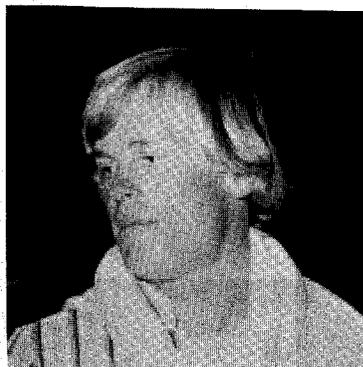
今、資金もだいたい貯まり、一人の学生として学年末試験のために準備しています。ある人は「二年間大学を休学することは社会に出て大きなマイナスになるよ」と私に言います。しかし、私はそのような人達にはっきりと言うことが出来ます。「私は今すでにそのマイナス以上の祝福を受けている」と。主なる神様は「汝らわが言うところを行わ

ば、主なるわれこれに対して責任あり」とおっしゃっています。神様が責任をもってくださるとは、なんと心強いことではないでしょうか！もはやなにも憂うことはありません。若い兄弟姉妹の皆さん主の御業に共に働こうではありませんか。私達のこの喜びは私達と同じあの若い主の御使い達によってもたらされたものなのです。そして私達もその主の御使いとして働くことが出来るのです。なんと素晴らしいことでしょう。「伝道は特権であり機会であるばかりでなく、神聖な義務であり責務である」と預言者は伝えています。

「友よ、あなたは望むなら宣教師になれるであろう。しかしあなたが雄々しく勇敢な宣教師になれるか、それとも名ばかりの宣教師になるかこのいずれかはあなたの準備にかかっている。」

私はこの末日聖徒イエス・キリスト教会が確かに神様の唯一の教会であることを心から証することが出来ます。そして、主なる神は私達が宣教師となるために準備する時に多くの祝福を与えて下さることを身をもって証することが出来ます。キンボール長老は生ける神様の預言者であり、神様から今も啓示を受けていらっしゃることを証します。そして主なる神はその預言者を通して私達若者に宣教師となるために準備するように伝えていらっしゃるのです。

これらの証をすべてイエス・キリストの御名によって申しあげます。アーメン。



すべての  
会員は宣教師  
である

ジョニー・ミラー  
兄弟

12月上旬、宮崎で行なわれたゴルフトーナメントに優勝したジョニー・ミラー兄弟は、翌日政界の福田赳夫氏、中曾根康弘氏と会食し、夕方帰路についた。離日に際し、日本の聖徒へ次のようなメッセージを残した。「私は日本の教会員たちを誇りに思っています。予言者がおっしゃったすべての会員は宣教師であるという教えにそって、皆さんが生活なさる様に願っています。この次、来日の時は、もっと時間をとって色々お話する機会をもちたいと思います。皆さんの上に神様の祝福がありますように。」

